

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（六）

フィリップ・ブオナローティ 著

田中正人 訳

目次

凡例 序言

第一章	革命の諸局面——テルミドールまで	以上、一六九号
第二章	平等派——バンテオン・クラブの創設と解散（その1）	以上、一七〇号
第二章	平等派——バンテオン・クラブの創設と解散（その2）	以上、一七一号
第三章	秘密総裁府——設置とその組織（その1）	以上、一七二号
第三章	秘密総裁府——設置とその組織（その2）	以上、一七三号
第三章	秘密総裁府——設置とその組織（その3）	以上、一七三号
第四章	蜂起に向けて——警察隊の叛乱、そして山岳派との提携	以上、本号
第五章	蜂起直前——情勢判断と戦術会議	以下、続載
第六章	平等者の共和国——財産の共同体の運営と防衛（その1）	以下、続載
第六章	平等者の共和国——財産の共同体の運営と防衛（その2）	以下、続載

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（六）

第五章 蜂起直前——情勢判断と戦術会議

蜂起運動に関わる幾つかの論点

山岳派委員会と秘密総裁府とが協議を行なっている間も、秘密総裁府と軍事委員会との間の意見交換はきわめて頻繁であった。両者は以下の論点について意見の一致を見続けていた。すなわち、

蜂起が起ること、

「軍事委員会に所属する」将軍たちが秘密総裁府の命令の下、敵に対抗して人民を指揮すること、

蜂起した人びとをアロンデイスマン〔バリの一二区〕ごとに分け、またさらにセクション〔四八の街区〕ごとに区分すること、

区には〔大〕隊長を、セクションには副〔中〕隊長を置くこと、

既存の権力機関に対する服従関係はすべて解消され、またこの種の〔服従〕行為はすべて即座に死刑に処せられること、以上の点で意見の一致を見続けていたのである。

相互理解をより深めるために、主要な当事者たちの間で完全な信頼関係を築くために、また、締結されたばかりの提携方針に照らしつつ、採るべきあらゆる措置の足並みを揃えるために、秘密総裁府と二つの委員会〔軍事委員会および山岳派委員会〕との全体会議を、〔共和暦第四年フロレアル〕一九日〔九六年五月八日〕夕方、ピク広場〔現在の

ヴァンドーム広場」近くのドウルエ宅で開くことが決められた。

グリゼルの裏切り

多くの高潔な人権擁護者たちと並んで、彼らが身を捧げていた大義を破滅させるべく、悪意をもって彼らの諸原則や言葉遣いを借用していたひとりの卑劣な偽善者がいた。ジョルジュ・グリゼル〔第三章訳注〔22〕を参照〕である。

陰謀家たちの計画を知った後には富への期待はすっかり消え去ることとなったのであるが、この富への道を切り開くという魂胆からであれ、あるいは専制支配に尽くしたいという直接的な意図からであれ、グリゼルは民主派の信頼を手に入れようと努めた。グリゼルは、軍事工作員宛ての指示を自分に漏らしてくれるようダルテを誘った後に、何事もいとうことなく自分についての好意的な評価を維持しようとした。それ以来、秘密総裁府の会議への出席〔最初の出席はフロレアル一日（九六年四月三〇日）〕を認められ、軍事委員会のメンバーに選ばれた彼は、そこにおいて極端かつきわめて性急な民主主義者である態度を示した。しかし彼はすべてを知りたがっていたのであり、またまさに、専制支配にとって邪魔な平等の友すべてを一撃で取り除くこと、また、民主派の意図すべてを専制支配に対して明かすことしか目差していなかったのである^①。

グリゼルが陰謀を密告

ついに主要な陰謀家たちと彼らの計画の一部とを知ったグリゼルは、フロレアル一五日（九六年五月四日）にそれらを政府に密告し、陰謀の書類とともに彼らを引き渡すことを政府に約束した^②。

グリゼルはそれ以来毎日、新たな裏切り行為をこの不実な行為に付け加えた。つまり、軍事委員会に熱心に出席した彼は、人を信用しやすい仲間を急き立て、さまざまな障害を取り除き、さまざまな措置を提案していたのであり、また、

民主政に対するグルネル兵營の献身⁽²⁾ぶりを誇張して描くことによって、一時も忘れることなく仲間の勇気をますます断固たるものとしていた。

グリゼルがもたらした情報に基づいて、リコール宅〔サン・フロランタン街五番地。現在のパリ第一区、コンコルド広場近く〕で会合が開かれるはずであるとの推測がなされ、一八日〔五月七日〕にその会合の場において陰謀家たちを急襲する命令が発せられた。しかし誰ひとり見つからなかった。そこで、翌日〔五月八日〕の夕方にドゥルエ宅で陰謀家たちが会議を開くはずであることがその裏切り者には分かっていたので、新たにドゥルエ宅を包囲するための措置がとられた。⁽³⁾

ドゥルエ宅での陰謀家たちの会議

実際には、この〔全体〕会議は午後八時半から一〇時四五分まで開かれた。パブーフ、ブオナローティ、ダルテ、ディエ、フィヨン、マサール、ロシニョル、ロベール・ランデ〔第四章訳注〔5〕を参照〕、ドゥルエ〔「序言」訳注〔3〕の補注〔*1〕を参照〕、リコール〔第三章訳注〔43〕を参照〕、レニエロ〔第三章訳注〔44〕を参照〕、ジャヴオーグ〔同上、原注〔20〕の補注〔*2〕を参照〕が出席していた。⁽⁴⁾グリゼルもまた出席していた。何たる裏切り者よ。彼は仲間たちを専制支配に売ったところ〔最初の密告は五月二日のこと〕であった。彼は会議の席で、仲間に対する死刑執行人たちを待っている間も、仲間と挨拶を交わし、拍手を送り、友情のしるしを恥じることなくきわめてあからさまに彼らに振りまいていた。

ドゥルエ宅で会議を催した陰謀家たちは、この上ない安心感に浸っていた。彼らの熱烈な感情と彼らの掲げる大義の神聖さとのゆえに、猜疑心はまったく湧いていなかったの⁽⁵⁾であり、他方、グリゼルの言質と口数の多さから、彼に対する疑いはすべて晴れていたのである。

秘密総裁府の報告

秘密総裁府はそのメンバーのひとりの口を通じて、新たな専制支配に對抗する民主派の運動の中核となる決定を下した理由を開陳した。その発言者は陰謀家たちに次のように述べた。すなわち、「諸君の誓いを思い起こしていただきたい。諸君が諸君の血によって確固たるものとしようと誓った諸原則が忘れ去られ、その結果もたらされた災禍を思い起こしていただきたい。諸君の約束を守るべき時機が到来した。闘わねばならない。さまざまな大義の中でもっとも貴重なもの勝利、フランス人民の自由、人民が諸君に寄せている信頼、人民の敵たちの激しい怒り、そして諸君自身の身の安全、これらのことが闘うことを緊急の義務として諸君に課している。

かつて陰謀がこれほど正当であったことはない。支配者を変えることが重要なのではない。われわれはひとりとして富も権力も望んではいない。裏切り者たちがわれわれに武器を手にするのを余儀なくしているのであり、しかも、われわれがひそかに集めた大勢の解放者が、人民を抑圧している一握りの専制支配者に襲いかかろうとしてわれわれからの合図を待つばかりになっているが、それは、わが同胞市民たちの生活、自由、そして幸福のためなのである。

すべてが茫然自失状態にあった。「共和暦第四年」ヴァンデミエール一三日（九五年一〇月五日）の勝利が無駄に終わった（第二章「平等の友たちは非難されるべき……」の項以下を参照）後に、貴族階級 *aristocratie* はいかなる障害にも遭遇しておらず、他方、自由への希望を失っていた民主派の大部分は、諸君の友たちの血にまみれた、憎むべき寡頭政治家たち *oligarques* と妥協しようとしていたからである。

「しかし」われわれの声を聞いて希望がよみがえり、かつてのエネルギーが再び現れた。そしてすでに、多くの勇氣ある共和主義者の不屈の熱意によって、人民は待ちきれなくなって大きな叫び声をあげて闘いの合図を求めている。

われわれは高潔な人びとすべてを知っているのであり、よこしまな人びとは震えている。無駄に終わるにもかかわらず専制支配が諸君から奪い取ろうとしている武器は、諸君が指定することになる日には、わが兄弟たちが手にしている

であろう。諸君は、われわれが準備している革命が完全なものとなること、そして、人民がもはや投機の自由や人を馬鹿にしたような平等で満足すべきではないことを望んできている。

実質的かつ法的な平等、これこそが諸君の崇高な企てをそれ以前のすべての企てから区別するべき重要な特徴である。すべての困難が克服されており、祖国への愛がわれわれを結び付けている。かつて国民を代表していた人びと（山岳派委員会のメンバー）が同意した諸条件、そして、一致して決定された「蜂起文書」の諸規定が、人民の蜂起の正しさと利点とを人民に対して知らせ、かつ保証することとなる。

時機は差し迫っている。大衆の苛立ちは極限に達している。これ以上遅延させるならば、おそらくはわれわれが二度と捉えることのできなくなるこの好機を逃してはならない。

われわれは諸君に次のことを要請する。すなわち、

われわれが取ってきたさまざまな措置に、諸君が必要と判断する措置を付け加えること、蜂起の時期を決定すること、である。

われわれは闘いの中で命を落とすか、それとも、勝利と平等とによって、かくも長期にわたる、かくも血なまぐさい革命に終止符を打つか、そのいずれかなのである」とその理由を開陳したのである。

ロベール・ランデが、蜂起の正しさを明らかにし、公会の再招集を正当化し、また、きわめて厳密な平等を実施することによって独自の完全に人民的な特徴を今度の革命に対して与える必要性について長々と力説した。

ところでグリゼルの方は、次のように述べていた。「私は、グルネル兵営の私の勇敢な同志たちのことをあなた方に保証する。私が聖なる平等の勝利にどれほど執着しているか、あなた方に分かっていただくために、私の貴族支配的な伯父から一万リーヴルの金銭を取り上げる方法を見つけたのであり、蜂起した兵士たちを元気づけるための食事提供にその金銭を充てることを述べておく」と。

山岳派の新たな賛同

「新しい蜂起文書」〔証拠書類 一二〕を参照が、改めて〔被追放〕公会議員たちの賛同を得た。彼らは、蜂起の日には、秘密総裁府が指定する場所に公会を設置するために仲間とともに赴くこと、また、決められた措置と蜂起した人民が表明するデクレの執行に忠実に協力すること、を約束した。

軍事委員会の報告

軍事委員会を代表してマサールが、秘密総裁府の考えにもっとも合致していると思われた攻撃計画の基本について報告を行なった。委員会の見解では、バリの一二の区を三つの師団にまとめた上で、同じ数〔すなわち三人〕の将軍が立法府、総裁政府そして国内軍司令部に向けてそれら師団を率いるべきであるとされていた。しかも、最初の師団はもっとも血気盛んな民主派で編成されるべきであるとされていた。また、大衆の苛立ちがきわめて強かったがゆえに、革命工作員たちと平等の積極的な友たちの合図に従ってすべての勤労者を総動員することは、容易に実現できることと見做されていた。マサールはさらに、蜂起の時期について決断を下すには、民主派の人数について、民主派の中の幾人かの能力について、また、行動当初にどうしても奪取しなければならない武器・弾薬が保管されている場所について、委員会はいくつか新たに確認する必要がある、と付け加えた。

会議は以下のような決定を下した。

会議の決定

「秘密総裁府は、陰謀の決着を急ぐこと、

秘密総裁府は、工作員たちに対して、軍事委員会の計画に合致した指令を与えること、

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（一）

状況についての最終報告を聞き、蜂起の日取りを決めるために、二日後〔五月一〇日〕に、再度会議を開くこと」が決定された。

警察がドゥルエ宅を包囲

会議が解散した直後〔解散から三〇分後の午後一時一五分〕、警察大臣〔コシヨン〕が、陰謀家たちの逮捕を期待しつつ、歩兵と騎兵の分遣隊を引き連れ、法を無視してドゥルエのアパートに押し入った。しかしそこにはドゥルエとダルテしかいなかったものであり、大臣は彼らを逮捕することが慎重さを欠くと考えた。不備の、あるいは間違つた命令のおかげで、さしあたり、統治者たる専制支配の腹黒い企ては流産に終わった。

グリゼルは陰謀家たちを安心させた

しかし、陰謀家たちの猜疑心をかき立てたはずのこの出来事も、彼らの安心感を強めただけであつた。〔それまで〕自分の誠意を彼らに立証してきたグリゼルは、彼らの不安を一掃し、新たな用心はすべて無用である、と納得させた。秘密総裁府は最初のうちは、秘密総裁府が身をさらした危険な目を裏切りのせいであるとした。そして、その張本人を見つけ出そうとして行なつた検討の中で、人民の大義のきわめて真摯な友のひとりに疑いをかけた。ジェルマンがドゥルエ宅で行われた会議に出席していなかった。彼がすでに追及の対象となつていたことが理由で欠席を余儀なくされたのであつたが、この欠席が彼に対する疑惑をある程度抱かせることとなつた。もっとも、彼の道徳性や行動や犠牲的行為や誠実さについての記憶が間もなくその疑惑を拭い去つたのであるが。それ以後は、グリゼル自身がダルテに示唆した理屈によって猜疑心はすべて消え去つた。グリゼルは「陰謀家たちの間に裏切り者がいたのなら、その裏切り者は、われわれが昨日いたドゥルエ宅にも、また〔フロレアル〕一日にわれわれ全員が会議をもつていた場所〔ティソ宅〕

にも警察を連れて来たはずである。そこには陰謀の文書が保管されていたのだから。^③しかしそうしたことは生じなかったであって、それゆえわれわれは、裏切りはなかったたのであり、また、警察の動きは警察が抱いている疑いと警察が自らの義務としている厳しい監視との結果にすぎない、と結論すべきである」と語ったのである。それによって不安はすべて消えうせたのであり、秘密総裁府はいかなる予防策を講じる必要もない、と判断した。そうした予防策があったならば、やがて秘密総裁府を打ちのめした災厄をいとも容易に避けえたのであるが。

マサール宅での工作員会議

秘密総裁府の指令を実行に移すべく、「フロレアル」二〇日〔九六年五月九日〕の夕方、新たな会議が開かれ、その場でディディエ、ジェルマン、フィヨン、マサール、ロシニオル、グリゼル、そして各区工作員すべてが発言した。マサール宅で開催のこの会議は、運動を同時に爆発させ、またその成功を確実なものとするのに最も適した手段について、経験豊かなことで知られていたこれらの同志に意見を求めること、そして、各革命工作員から彼が手にしている人間、武器、弾薬そして献身の面での資源が正確にどれほどなのかについて情報を得ることを目的とするものであった。

工作員たちの提案

第六区工作員のクロード・フィケは、ヴァンセンヌに野営している部隊が好意的な態度である場合にはそれらの部隊の解体を掩護するために、あるいはそれらが悪意を抱いている場合にはそれらの部隊が都市〔パリ〕に入り込むのを阻止するために、フォブール・〔サンⅢ〕タントワヌにバリケードを築くことを提案した。

第七区工作員のバリは、秘密総裁府から助言を求めるよう勧められたある將軍の提案にかかる攻撃計画を報告した。彼は、どのようにすれば容易に総裁政府を逮捕できるかについて述べ、また、総裁政府のメンバーたちが〔人民〕裁判

を免れることを可能としかねないリュクサンブール宮の地下道の出口を確保することを提案した。

第三区工作員のカザンは、フォブール〔・サン〕、タントワーヌとフォブール〔・サン〕、マルセルとの間の連絡を〔植物園近くのセーヌ河上に構築する〕船橋によって確保すること、そして、モンマルトルの高台から抵抗の拳に出かねない貴族たち *aristocrates* を震え上がらせるためであれ、あるいは、敗北した場合にはそこに再結集するためであれ、当初からその高台を占領することを望んでいた。

第十一区工作員のボドソンは、キリスト教の実践〔日曜日のミサへの参列〕に依然として執着している労働者たちとそれを捨てた人びととをより容易に結び付けうるよう、旬日〔第三章訳注〔76〕を参照〕と日曜日とが重なる日に蜂起が行なわれることを望んだ。彼は、兵士の隊列を崩すために、また兵士と人民とが一体となるように仕向けるために、女性や子供を用いることを提案した。

世論に関しては、革命工作員たちは秘密総裁府に通知したことを繰り返した。すなわち彼らは、苛立ちが広範かつ極度に高まっており、兵士が人民を叩きのめす決心をしない限りは専制支配の崩壊は確実である、と述べた。この場合には、彼らは、慎重に準備された軍事的措置の掩護を受けた、民主派の数と勇気とを頼りにしていた。

軍事委員会は工作員たちに新たな情報を求めた

しかしながら軍事委員会には、工作員たちが提供した情報は十分なものとは思われなかった。そこで軍事委員会はいっそう正確な情報を求めたのであり、蜂起において重要な役割を果たすことが決まっている同志たちが自らの目的について思い違いをすることのないよう、彼らに意見を求めることを望んだ。これらの新しい報告は、マサールに届けられ、翌日〔フロレアル二一日〔九六年五月一〇日〕朝〔フォブール・ボワツソニエールのパピヨン街のデュフル宅で〕、と指定された全体会議においてマサールから伝えられることとなっていた。

日増しに高まる騒乱状態^①が、間近に迫った衝突の前兆を全般的に示している間に、秘密総裁府は味方につけた戦力をひそかに見積もり、それらの戦力に伝えるべき運動の手はずを整えていたのであり、また、革命の大目標、すなわち財産と労苦との平等な配分の達成を自ら目標と定めた計画を練り上げていた。

民主派の側の戦力

周囲を見回してみると、秘密総裁府は、共同の目的に対する秘密総裁府の尽力に賛同し、専制支配に立ち向かいたくてうずうずしている、きわめて多数の熱烈な革命の友からなる軍勢の先頭に位置していることを知った。すなわち、テルドール九日以前に職務を遂行していた権力機関のメンバーたち、民主的精神で有名なパリの「セクシヨンの国民衛兵隊に所属する」砲兵たち、解任された将校たち、秘密総裁府がパリに呼び寄せたか、あるいは迫害を免れるためにパリにやってきていた諸県の愛国派、愛国心 *amour patrie* あるいは不服従のゆえに勾留されている軍人、立法府の精鋭兵たち、警察隊のほぼすべて、そして癡兵院の部隊全体からなる軍勢の先頭に位置していたのである^②。

人民の不満と苛立ち

秘密総裁府はさらに、パリの周辺に野営している兵士たちの中で激しい不安が広がっていることに気づいていたのであり、また、勤労者たちの不平の声も秘密集会や野外で毎日組織されていた大規模な集会においてあからさまに上がるのを耳にしていた。

その上、平等の真の支持者である無産者（プロレタリア *proletaire*）たちの熱意は幾度となく引き伸ばされてきたのであるが、彼らの境遇を和らげることとなるさまざまな措置が蜂起の始まりから実施されるのを彼らが目にするときには、彼らの熱意はいっそう強まるであろう、との確信が秘密総裁府にはあった。また秘密総裁府は、その工作員たちが

人民の激しい感情を秘密総裁府に対して描いて見せることによって、闘いの合図を出すよう大胆に秘密総裁府に要求していただけない、自らの党派の戦力を確信していた。

専制支配の側の戦力

秘密総裁府は自らの戦力の一覧表とは別に、専制支配の側が秘密総裁府に対置しうる戦力の一覧表も考慮していた。劣弱なものであっても武装部隊が人民の前進を阻止しかねないこと、王党派は、政府を嫌悪してはいるものの、それよりもはるかに憎むべき平等社会の法に服する事態が生じないように、おそらくは政府を防衛するであろうこと、国民衛兵隊をもっぱら指揮している金持ちの大多数は民主政の勝利を悲嘆にくれながら見るであろうこと、彼らの大部分が武装するであろうこと、そして政府はそれ以外の人びとに武器を供給するであろうこと、以上のことが秘密総裁府には分かっていた。

人民が手にしている手段

陰謀家たちの側では、立法院〔警備〕の精鋭兵と警察隊員たちが備えている武器・弾薬を自由に使いえたのであり、また、武器販売商、諸セクションの本部 chef-lieu、チュイルリ宮、フイヤン修道院〔サン＝トノレ街二二九、一三二、一三三、一三五番地〕そして療兵院に保管されている武器・弾薬をもっとも果敢な市民たちを使って、また、倉庫の警備を担当している人びとを味方にすることによって、奪い取ることを意図していた。陰謀家たちはさらに、彼らに忠実であったヴァンセンヌ兵営の砲兵隊を当てにしていたのであり、さまざまな部隊が人民に合流すること、膨大な住民の突然の爆発が専制支配の支持者たちに激しい恐怖を与えること、また、政府が主に頼みの綱としていた、運命の女神のお気に入り〔金持ち〕たちの実に当然の臆病さのうちに人民が強力な援軍を見出すことを期待していた。

總裁バラスが陰謀家たちに手を貸すことを申し出

ジェルミナル三〇日〔九六年四月一九日〕に、總裁バラスが秘密總裁府の認めた〔使者である〕ジェルマンと長時間にわたる協議を行ない、その中で人民の間に表れている興奮状態の原因をジェルマンに打診したのは、また、フロレアル二〇日〔五月九日〕にロシニョルおよびルーエルを介してあるいは自分のスタッフとともに蜂起を率いる地位につくこと、あるいはフォブール〔・サンリ〕タントワーヌで自ら人質となることを主要な陰謀家たちに対して申し出たのは、人民が当然に抱く憎悪を免れるためだったのであるうか、陰謀家たちを支援するためだったのであるうか、それとも陰謀家たちを見分け、彼らを亡き者にするためだったのであるうか。これらの事実について總裁バラスにとって名譽ある解釈を与えようとする人びとは、バラスが〔フロレアル〕二〇日にあれほど関心と信頼とを寄せているように見えた人びと〔陰謀家たちに〕に関してフロレアル一五日〔五月四日〕に總裁政府に対してなされた密告〔グリゼルによる〕をなぜバラスが〔陰謀家たちに〕知らせなかったのか、を説明することも必要であろう。

パリにおける民主派の戦力を理解した後に、もっとも見識ある愛国者たちの意見を集めた後に、そして軍事委員会の見解を聞いた後に、秘密總裁府は、すべての努力が一樣に同じ目標に向かうように、また、慎重さを欠いたために企てが失敗することのないように、蜂起の形態を大まかに示す必要があると考えた。正確に歴史を書き記す上で、状況ゆえに必要なとなったかもしれない変更は別として、ここで秘密總裁府が承認した諸点を書きとめておかねばならない。

蜂起運動の指令

ずっと前から、蜂起總裁府なるものの公式発表によって蜂起を開始するのが得策であると認められていたのであり、すべてが蜂起委員会の下に結集し、かつすべてがその推進力に従うべきこととなっていた。

この公式発表は、山岳派委員会と一致して決定された蜂起文書の公布によってなされるはずであった。

この文書の中では、また蜂起の間および蜂起後に出されることとなっていた文書においては、テルミドール九日以前に平等体制が準備されていた形態〔公安委員会〕に倣うために、また貴族支配が設けた形態〔總裁政府〕との類似をすべて避けるために、秘密總裁府は蜂起公安委員会 *comité insurrectionnel de salut public* という名称を採用していた。

蜂起軍を三つの師団に分けることが採用された。三人の將軍〔少將〕が蜂起委員会の命令に従う、總司令官の命令の下で師団を指揮すべきものとされた。各將軍には区の大隊長が従い、さらに区の大隊長にはセクションの隊長〔中隊長〕が従い、セクションはさらに小隊に分けられるものとされた。

將軍に関しては、委員会はフィヨン、ジェルマン、ロシニョルそしてマサールに着目していた。同じ委員会が任命する小隊の隊長および指揮官は、「蜂起文書」の公表、警鐘、喇叭そして自由の友たちの声が人民に対して諸権利の奪回を呼びかけたときに、人民の隊列を形成するために姿を現すべきものとされた。

重要な点は、「蜂起文書」のさまざまな措置を人民に説明し、その正しさと利点とを人民に明示する任務を負う見識ある民主主義者を各セクションに配属することであった。

人民軍がこうして形成された後は、勤労諸階級の中で全般化すると期待されていた蜂起の支援を受けつつ、その軍隊を専制支配と対決させ、専制支配の側の戦力と戦わせなければならなかった。権利侵害者たちを逮捕する任務を帯びた共和主義者たちを支援するために、幾つもの縦隊が立法院、總裁政府、參謀本部に、そして大臣たちの館に向けて進軍するはずであった。

戦闘にもっとも慣れ、装備ももっとも良好な諸セクションが、武器および弾薬の倉庫に、またとりわけ、八〇〇〇人を超えるものではなかったが、人民に合流しようとしていると思われる兵士のいたゲルネルおよびヴァンセンヌの兵營に向かうこととなっていた。

こうした合流を早めるために、大規模な戦力という装置と並んで、説得のための言葉を用いようという提案がなされ

ていた。例えば、弁士たちが兵士たちに対し政府の犯した犯罪と彼らの祖国への義務を思い起こさせ、女性たちは彼らに冠と冷たい飲み物を差し出し、療兵院の兵士は自分たちの模範に従うよう促すこととなっていたのである。最悪の場合には、通りを塞ぎ、硫酸を混ぜた熱湯を部隊に滝のように降らせ、石や瓦やスレートや煉瓦を雨霰と降らせるための措置も講じられていた。

残りの人民軍は、パリの出口〔市門とセーヌ河〕を警備し、人民のさまざまな部隊の間の連絡を保ち、都市〔パリ〕の食糧供給を守り、反人民的な集会をすべて阻止し、貴族たちとの間の通信をすべて途中で押さえ、略奪の試みをすべて退け、蜂起当局の命令を実施することに用いられることとなっていた。

プレリアール〔第二章訳注〔2〕を参照〕の災厄を招いたのと同様の不測の事態は、もしそれらの事態を未然に防ぐことを念頭においておかなければ、企ての成功を疑わしいものとしかねなかった。そうした事態の中でも、必要な時間を通じて人民を戦闘態勢にとどめておくことを妨げた食糧不足は、きわめて危惧すべきものであった。それゆえ蜂起委員会は、人民が集まることのありうる場所すべてに食糧を豊富に供給するための手段について熟考していたのであり、まさに主要にこうした考えから、蜂起委員会は、テルミドール九日までは任務を遂行していた革命委員会の三人のメンバーを運動の開始直後から各区に配置すること、また、すべての公共および民間の倉庫に保管されている食料品を差し押さえることによって、蜂起した市民たちに彼らが必要とするかもしれないものを直ちに手に入れさせ、不幸な人びとに対して約束されていた基本的な扶助を即座に実施する任務を彼ら革命委員に負わせることを決めていたのである。

貧困者の住居と衣服

新たな革命について明確なイメージを人民に対して与えるために、また、人民の熱意を強固にするために、蜂起委員会は蜂起の間に二つの命令を公表するつもりでいた。それらによって、貧困者たちは直ちに共和国の負担で衣服を支給

され、また同じ日に、金持ちたちの家に住居をあてがわれることとなり、金持ちたちに残されるのは必要不可欠な住まいだけとするものであった。⁽⁸⁾

裏切り者の処罰

蜂起委員会は、主要な罪人たち、すなわち兩院および總裁政府のメンバーを人民裁判にかけようと望んでいたが、その人民裁判をどのようなものとして考えていたか、知っていたかどうか必要がある。その犯罪は明白なものであって、刑罰は死刑であった。重大な見せしめが必要だったからである。

しかしながら、そうした見せしめには厳正な正義と公益という観点とが現れているべきであるとされていた。蜂起した人民は自分たちが犠牲となった裏切りについて個々人の詳細な報告を聞くこと、また、被疑者のうちで、大目に見うる過ち、素朴で人民的な素行、あるいは蜂起の間に平等に対して何らかの目覚ましい奉仕を行なったがゆえに政治的誤りを大目に見うるような者については、断罪の対象から外すよう促すことで合意がなされていた。⁽⁹⁾ 蜂起委員会には、死刑囚たちは彼らの邸宅の残骸の下に埋葬され、その残骸がずっと後の世代に平等の敵たちに科せられた正当な処罰を想起させるようにする（保存される）、とする意見も存在した。

あらゆる攻撃および防衛手段が、委員会が選任しようとしていた各区工作員および將軍たちにまさに指示されようとしていた。⁽¹⁰⁾

首尾よく終了した蜂起からは、必然的に新たな事態が生じるはずであって、きわめて緊急を要する措置を準備するために、前もってその基礎の一部を想定しておくのが賢明であった。それゆえ蜂起委員会は、そのことを考察の対象としたのである。

山岳派との提携以前の段階で、蜂起委員会（秘密總裁府）が新たな権力機関とその行動規範とを蜂起した人民の手で

どのように樹立させるつもりでいたか、については前述「第四章」専制支配を解体した後のパリの民衆の集会」の項以下を参照したとおりである。しかし、提携によって必要となったさまざまな変化に、山岳派の曖昧な動きによって生じた不信任がさらに別の変化を付け加えた。

専制支配に勝利しても、それが平等へのきわめて純粋な愛に突き動かされた指導者たちに確実に置き換えられるのであれば、その勝利はさして重要な意味をもたないであろう。創出するよう求められている諸制度の精神と完全に調和した教説、品行そして生き方全体の備わった人びとが必要であった。

初期の体制においては、蜂起委員会は、委員会を突き動かしていた精神が新しい国民議会の中でも全面的に行き渡ることを確信していたのであり、まさにその点に、その後平等と人民的な憲法とを樹立するために人民に提供しうる、もっとも強力な保証が存在していたのである。

山岳派の曖昧な行動ゆえに新たな用心が必要に

しかし、公会の一部を再招集することが決められて以来、蜂起委員会は、人民を新しい権力機関の逸脱から守ることを自らの義務と考えた。蜂起委員会が山岳派に対して行なった非難は、蜂起委員会が山岳派に対して全幅の信頼を寄せていたわけではけつてないことを十分に示していた。

不信任をもたらした古くからの理由に、これらの公会議員が少し前にとつた行動ゆえに新たな理由がさらに付け加わっていた。委員会は、提案された追加項目「一県につきひとりの民主派議員」を退けようと努めた際の巧妙さ、議論の中で彼らが示した尊大さ、そして人民に対する諸権利の回復を諷の分からぬ譲歩と呼んだ際の貴族支配的傲慢さに非常に驚いたのであった。

蜂起委員会はさらに、合意に達した諸条件を回避しようとして、また、共和国の最高権力機関を山岳派の手中に独占

させようとして、ひそかにさまざまな駆け引きがなされていることを知らされてもいた。ところで委員会は、彼ら〔山岳派〕には善をなすことはできないという強い確信を抱いていたがゆえに、いかに些細なものであれ、彼らに権力を委ねることによって、ある専制支配をもうひとつ別の専制支配に置き換えることにしかならないような活動を、許しがたい犯罪と見做していたのである。

それゆえ再招集される公会議員〔追放されていた山岳派公会議員六九人〕に対して、約束を守るように、また、実質的かつ持続的な平等の樹立をいっさい妨げることがないように強いるための手段のことが熟考された。陰謀家たちは、まさに人民による専制支配の打倒を望んだのであり、またまさに真理の影響力によって人民の支持を得ていたのであった。さらに彼らは、やはり真理と人民とを使って、新たな奸計を挫折させようと決意したのである。

蜂起の諸措置は人民によって承認されるべきこととなっていた

「蜂起文書」の諸規定では国民公会の一部が再び権力行使の場に召還されることとなっていたが、そうした規定にもかかわらず、蜂起委員会は、蜂起した人民がはっきりと表明する意思によって国民公会が再建されること、合意を見ていた追加がその人民によって正式に宣言されること、そして、その人民が自ら追加の議員を選任することを望んでいた。さらに委員会は、この同じ人民が、テルミドール九日まで在職していた行政官に対し直ちに職務に復帰するよう命ずること、蜂起の諸措置すべてを追認すること、貧困者の住居および衣服に関する委員会の決定を迅速に執行するよう命ずること、そして本書で先に述べた重要なデクレを宣言した後に、新しい公会を直ちに設立することを望んでいた。

蜂起委員会はこうした目的のために、専制支配の崩壊後直ちに、蜂起委員会が会議を開いている場所の周りに多数の市民を集めるべく、あらゆる措置を講ずるよう、工作員たちに対して勧めていた。その場所において蜂起委員会は、国民が押しつけられていた新たな圧政を打ち砕くために委員会が行ってきたことのすべてを人民に報告することとなっ

ており、また、共和国の救済にとって必要と判断していたデクレを人民に要求することとなっていた。委員会のメンバーのひとりがこの重大な事態の中で述べるはずであった演説は、草稿ができており、議論に付されるところであった。

新たな権力機関への蜂起委員会の参加をめぐる議論

きわめて厄介な問題点が蜂起委員会で慎重に議論された。蜂起委員会のメンバーが新しい権力機関の権力行使にどう関与すべきかを決定する、という問題であった。委員会の意図は、腹藏なく、また率直に人民に対して語ることであり、人民主権に明白な敬意を表することであった。もし蜂起の完全な成功のために一時的に国民の全権力を帯びることが必要であると判断していたのであれば、委員会は今権力をためらうことなく要求していたであろう。しかし、この種の制度は以前にすべて却下されていた（第三章「既存の権力機関に取って代わるべき権力機関」の項以下を参照）のであって、残されていたのは、さまざまな立法措置を新しい公会に示唆する任務を帯び、公会の決定したデクレを執行することとなる、少数のメンバーからなる機関を設置するよう、蜂起した人民に勧めることが適当であるのか、それとも、この重要な務めを新しい公会に委ねた方がより有効なのか、を検討することだけであった。

蜂起委員会の決定がいかなるものであったにせよ、新たな革命の成功には、問題となっている機関が〔蜂起〕委員会のメンバーのみで構成されることが求められるのかどうか、を自らに問う必要があったであろう。

この点に関してはいかなる決定も下されなかったものであって、それゆえ私にできるのは、委員会が採用しえたさまざまな計画の長所と難点とを委員会が比較した際の論理を報告することだけである。

まず、蜂起の主導権を恒常的な、したがって必然的にきわめて広範な権力へと転換すれば、蜂起委員会のメンバーたちには野心的で欲得ずくの目的があるのではないか、という疑いがかかれようになると考えられた。また、このような嫌疑は容易に信憑性を獲得し、流布することによって、自分たちの展開の妨げとなるのであって、自分たちが目標と

定めていた善を実現するための時間を残してくれなくなるのではないか、との懸念があった。またさらに、自分たちの企ての意図を法律に伝えるのに、また、最高政務官〔行政官〕職 magistrature supreme〔第三章の訳注〔32〕を参照〕にその権限を行使するのに相応しい市民たちをつけるためには、新しい公会に陰謀家たちが参加すること、自分たちの固い団結、そして自分たちに寄せられている信頼だけでは不十分なのかどうか、との自問があった。

他方、蜂起委員会の見るところでは、諸原則の純粹さが勇氣や断固とした態度と結びついており、かつ、実践の場においてはそれら〔勇氣と断固とした態度〕を抑制するのに必要な知性と結びついている人物は多くいたわけではなかった。委員会は、企てを開始する大胆さを備えた人びとにその企てを完遂する務めを委ねないことがいかに危険であるか、を見抜いていたのであり、また、委員会と競合関係に入りつつあった幾人かの人びとの裏表ある態度を危惧していた。長い間にわたって迷った後に、われわれ陰謀家は、法律の發議権と執行がもっぱら陰謀家たちのみ託されるとするデクレを人民に要求することをもう少しで決定するところであった。

情勢の展開の中で民主派 *parti démocratique* の指導部に据えられた人びとを貴族支配の側による復讐に引き渡した裏切りによって、多くの計画が不完全なままとなり、また多くの作業が中断されてしまった。したがって、もし、彼らの意図のすべてを十分に知っていたために、蜂起直後に国民が置かれることになる状態に関して彼らが抱いていたイメージ〔第九章〕について、彼らが目差していた最終目標〔第六章〕について、またその目標を達成するために彼らを用いるつもりでいた諸手段〔第七章および第八章〕について、ある程度明らかにする必要があるのであれば、彼らの陰謀の物語〔歴史〕をここで終えることもありえたであらう。

蜂起後のバリの状況の概要

かくも根底的な革命があらゆる色合いの貴族たち *aristocrates* に植えつける激しい恐怖、そしてかくも人民的な改

革が多数の勤労者たちからなる階級のうちにきき立てる喜びのさなかで、新しい公会が設立されようとしていたのであり、この公会はその構成員のほぼ全員の方針によって、また、それを取り巻く人民の願いによって、平等を強固に確立するよう、仕向けられることとなっていた。

公会と並んで、蜂起によって任命された政務官たち *magistrats* の補佐を受ける蜂起委員会が、少なくとも当座は、市民を運動に引き入れたはずの文書〔証拠書類 一五（蜂起文書）を参照〕に含まれている諸規定の実行を取り仕切ることとなっていた。蜂起委員会の意見に基づいて、パリの膨大な貧困大衆が彼らのあばら家から突然に連れ出され、清潔で快適な住居に移されていたことであろう。また衣服が貧困者に支給され、公営質屋に預けられていた衣服も無償で返却されていたことであろう。

同時に、人民の食糧を確保するため注意深く警備がなされるはずであった。新たな革命の諸原則が、再開されるはずの集会において市民に説明されたことであろう。多数からなる人民衛兵隊 *garde populaire* が悪意ある人びとを阻止し、新しい体制の確立に必要と判断されるあらゆる活動を容易にしたことであろう。

どれほど武力を使わねばならなかったかを正確に測ることは困難である。陰謀家たちは、ぜひとも勝とうと望んでいたものであり、勝利するか、さもなければ祖国の廃墟の下に埋葬される決心を十分に固めていた。抵抗があった場合を除いて、採用すべき厳格な措置も、主要な権利侵害者たちの処罰と、蜂起委員会が名簿を作成させた危険人物の逮捕の範囲を超えることはなかったであろう。

新たな貴族支配が構築した基本構造を覆すのに必要と判断された準備作業に、パリの革命を共和国全体に共通のものとするのに、また、共和国全土に平等と人民主権の諸制度を樹立するのにもっとも適していると思われる準備作業を付け加えておく必要があった。

諸 県

蜂起委員会は存在を始めた直後から諸県と諸方面軍のことに関心をもっていた。委員会はいたる所で自らの文書を流布させていたのであり、どこでも民主派は委員会の提案を知っており、また委員会に協力する準備ができていた。委員会のメンバーのところには膨大な量の郵便物が届いていたのであって、それらは、民主派が数多くいる場所と、きわめて大きな信頼を寄せうる人物とを教えてくれたのである。いたる所から、革命家たちが、彼らを分裂させていた微妙な見解の相違を捨てて、純然たる平等の党派にこぞって賛同するようになっていることを教えてくれた。

諸方面軍に関しては、委員会は公会の代表委員たちがテルミドール九日以降、彼らが秩序破壊と不服従の精神と呼んだものを押さえ込むのにどれほど苦勞したかを知っていた。委員会は、「共和曆第三年憲法」が方面軍全体に不平不満を言わせたことを知らないわけではなかった。委員会はまた、兵士たちがテルミドール九日以降に復職した将校たちの指揮にいらいらしながら従っていること、また、委員会に通信を送ってくる幾人かを含む隊長の中には、依然として民主政の諸原理に強固な愛着を示す者が何人もいることをも知っていた。さらに委員会は、総裁政府が共和国のさまざまな方面軍に派遣した幾人もの公会議員の協力を当てることも可能であった。

その上、パリの模範がフランス全土の人民に対して、真実を知ったことによって抑えがたいものとなる推進力を与えることはまず確実であった。蜂起委員会が主に自らの希望の基礎としていた、こうした知識を兵士の間に広めるために、兵士の許に代表委員を派遣し、フランス人民に彼らの救済の知らせを告げるために準備されていたさまざまな宣言に合致した宣言⁽¹⁵⁾を彼ら兵士にも送る必要があった。

原 注

(1) グリゼルが秘密総裁府に宛てて書き送った書簡を参照 (証拠書類 二〇) 「フラン＝リーブルの書簡の筆者から、蜂起総

裁府の共和主義的同志たちへ」および「証提書類 一二（「フラン＝リーブルから秘密総裁府その他へ」）。

(2) 当時の憲法は夜間の家宅捜査を禁止していた「九五年憲法」第三五九条は「各市民の住居は不可侵の避難所 *asile* である。夜間には、何人も市民の住居に立ち入る権利をもたない。……」と規定。

(3) グリゼルはその後、「フロレアル」一日（四月三日）の会議が開かれた場所を思い出すことができない、と法廷（ヴァンドーム高等法廷）で陳述した。

(4) 誇張を交えなくとも、不満と苛立ちをいたる所で爆発させていたきわめて多数からなる労働者階級を勘定に入れなくとも、われわれは、当時のバリで蜂起の主導権をとる用意ができていた人間の数は一万七〇〇〇人にも上っていた、とすることが出来る。以下は、秘密総裁府が決断を下す基礎となった表である。

革命家……………	四、〇〇〇人
旧の権力機関のメンバー（ジャコバン派）……………	一、五〇〇人
砲兵（セクシヨンの国民衛兵隊に所属）……………	一、〇〇〇人
解任された将校……………	五〇〇人
諸県の革命家……………	一、〇〇〇人
立法府の精鋭兵……………	一、五〇〇人
勾留されている軍人……………	五〇〇人
警察隊……………	六、〇〇〇人
療兵院……………	一、〇〇〇人
〔合計〕……………	一七、〇〇〇人

(5) われわれの陰謀より後のひとつの事実がこの謎を明らかにしてくれるように思われる。秘密総裁府が暴力的に解体され、その幾人ものメンバーが投獄された後に、他の民主主義者たちが彼ら「投獄された秘密総裁府のメンバー」の鉄鎖を打ち砕こうと、また、彼らの活動を継承しようと試みた。総裁バラスの二人の友がその民主主義者たちの中に入り込み、バラスが彼らと同じ願望を抱いており、彼らの努力を効果的に支援したがっている、と彼らを説得した。ゲルネル兵営の民主主義者たちおよび軍人と友好関係を結び *fraterniser*、その後待望の変革を行なうためにその民主主義者たちおよび軍人とともに

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（六）

総裁政府に向かう、とする計画が立てられたのは、彼ら二人の助言によるものであった。事実、バラスの名において彼の方たちが行なったさまざまな約束、彼らと与えた約二万四〇〇〇フランの金銭、そして兵營の幾人かの将校の誓い、これらが「共和国万歳」を叫びながら、そして愛国歌を唄いながら、武器を持たずに大挙して兵營に赴く決定をその民主主義者たちにしたのだから。彼らはそこで、彼らに約束されていた友好関係 *fraternité* を目にしたのではなく、死に遭遇した。誰がこうした罠を仕掛けたのであろうか。また誰が一撃で民主派を消滅させようとしたのであろうか。

〔*1〕 パブーフ、フオナローティらが五月に逮捕され、アペイ監獄を経てテンブル監獄に移され、さらに高等法廷の設置されたヴァンドームに移送されるまでの間に、平等派の残存分子による幾つかの散発的な動きがあった。逮捕を免れていたカザンによるフオブル・サン・タントワーヌでの動きがあったが、カザンは六月一日に逮捕。六月下旬にはドゥルエ救出の工作があった。実際にドゥルエは八月十七日にアペイ監獄から脱獄を果たした。ドゥルエとの関係が高等法廷で明らかになることを恐れたバラスの策謀によるとされる。同じく逮捕を免れていたフィヨン、ベルトランらは、タンブル監獄のパブーフらの救出を考えており、グルネル兵營内の不満分子に期待を寄せていた。

〔*2〕 フオナローティが「バラスの二人の友」として念頭においていたのは、カルノーおよびコション〔訳注「1」の補注「*1」を参照〕であると思われる。フオナローティはバラスに力点を置いて「民主派」殲滅の罠が仕掛けられたと見ているようであるが、むしろカルノーこそが「陰謀」摘発から「グルネル兵營事件」を経てヴァンドーム裁判にいたる展開を主導した張本人であろう。

〔*3〕 オリジナル版では「抗議」、「誓い」を意味する *protestations*、エディシオン・ソシアル版では「誓い」を意味する *prestations* となっている。イタリア語訳では *proteste* (抗議)、英訳版でも *protestations* (抗議) である。

〔*4〕 グルネル兵營事件が総裁政府と警察、その密偵・挑発者による罠であったとする見方については、疑問も呈されている。柴田三千雄は、「現在の所決定的な判断の材料がない」が「蜂起側の計画が警察によって利用された」とする（前掲『パブーフの陰謀』一一八ページを参照）。また、Cf. R. B. Rose, *Gracchus Babeuf; The First Revolutionary Communist*, op. cit., pp. 277-286.

(6) 『証拠書類 一一一「新しい蜂起文書」』を参照。

(7) 社会に対してもたらす取り返しのない損失の点で、習俗の退廃が育まれ、助長される点で、また立派な法律を受け入

訳
注

れる際のさまざまな障害をもたらす点で、住居および衣服の正規の配給とあらゆる改善を妨げる略奪とを混同するのは間違
いであろう。法のみが平等を再建すべきなのである。

(8) 「証拠書類 一三」「草案」を参照。

(9) 「証拠書類 二四」「人民裁判に関する命令案」を参照。

(10) 「証拠書類 二五」「総裁府から工作員たちへ」を参照。

(11) 第四章「バリの蜂起した民衆に提案すべきデクレ」の項を参照。

(12) 「証拠書類 二六」「部分稿 勝利した人民に対する演説草案の部分稿」を参照。

(13) 約一七〇人の議員 *deputies* で構成（追放された山岳派の元議員七二人と一票につきひとりずつ選出されることとなっ
いた九七人の合計数）。

(14) 彼らはまだ、イタリア、スイス、エジプト、ドイツそしてスペインでの戦利品をふんだんに与えられてはいなかった。

(15) その趣旨については、証拠書類として収録されている「証拠書類 二七」「兵士に対する宣言文」を参照。

(1) 第四章「共和暦第四年フロレアル一日の政治」軍事会議の項を参照。この会議（四月三〇日）に軍事委員としてグ
リゼルも出席していた。五月二日の時点で、グリゼルはカルノーに手紙を送り、直接接触を求めた。これに対してカルノー
は四日午後九時にリュクサンブール宮で面会する旨、回答した。その会場で興味をもったカルノーは、翌五日同じ時刻に同
じ場所、バラスを除く総裁たちとの会見を設定した。六日以降、グリゼルは秘密総裁府や軍事委員会の会議に出席する
とともに、警察大臣のコシオンに事態の推移を報告していた。

(*) 1) コシオン・ド・ラバラン、シャルル Charles Cochon de Lapparent（一七五〇年ドゥー・セーヴル県一八二五年ボワ
ティエ）。一七八九年一月から第三身分から選出されて三部會議員。ジャコバン・クラブに参加、国民公會議員にも選出。
国王処刑に賛成。軍事委員会に所属、党派の立場は明確にせず。九四年には公安委員会委員。テルミドール後になって反ロ
ベスピエールの立場を表明。九五年に一〇月に元老院議員にヴァンデ県から選出され、九六年四月三日にカルノーによって
警察大臣に任命された。「パブローフの教説についての分析」（証拠書類 八）に注目し、「陰謀」の摘発・鎮圧を精力的に

平等をめざす、いわゆるパブローフの陰謀（一八）

展開。カルノーおよびルトウルヌールとともに、「グルネル兵営事件」に関与したと思われる。王党派への弾圧も厳しく展開したが、後に王党派に接近したとして、断罪。ボナパルトによるクーデタ後に政界に復帰。

〔*2〕ルトウルヌール、ルイ・フランソワ・オノレ Louis François Honoré Leclercq (一七五一年マンシユ県グランヴィル―一八一七年ベルギー)。革命前に工兵隊中隊長。メジエール工兵学校でカルノーと仲間。九一年に立法議会議員、九二年には国民公會議員に選出され、軍事関係に専念。テルミドール九日にはパリにおらず、九五年一月に公會議長を務めた後、九五年八月から公安委員会メンバー。その後元老院議員となり、ヴァンデミエール一三日には王党派と闘った。九五年一月三日に総裁に選任され、海軍と軍事問題とを担当。カルノーの右腕として急進的な革命派に反対し、バブーフの陰謀弾圧および「グルネル兵営事件」に関与。共和暦五年の議員改選で王党派が進出した事態への対応をめぐってパラス、ルーベルと対立。九七年五月から軍務に復帰するも、フリュクチュドール一八日のクーデタ翌日に召還され、退役。

〔2〕グルネル兵営の位置については、第三章訳注〔26〕を参照。パリの外に位置するこの兵営には、かつての警察隊付き騎兵分遣隊が第二竜騎兵大隊に配属されていた。「グルネル兵営事件」については第二章原注〔16〕への補注〔*1〕を参照。

〔3〕コシヨンは、蜂起の動きが熟すのを待って、陰謀家たちを一網打尽にすることが最善の策と考えてはいたが、総裁政府全員の署名による命令に基づいて、五月七日午後一時にリコール宅を手入れた。

翌八日に会議全体が開かれるとの情報を得たグリゼルは、コシヨンと打ち合わせて、手入れの時刻を九時半に設定していた。しかしカルノーの命令によってドゥルエ宅への急襲は会議終了から半時間後の午後一時一五分のことであった。

一〇日午前一〇時前まで、グリゼルはバブーフのその頃の隠れ家(グランド・トリュアンドリ街のティソ宅)と軍事委員会の本拠(パビヨン街のデュフル宅)の住所を知ってはいなかった。陰謀家を一網打尽にするとともに証拠書類等を押収するという観点からすれば、山岳派のドゥルエ宅では不十分だとカルノーが判断したからであろうか。

〔4〕これらの出席者のうち、最初の五人は秘密総裁府メンバー。残る二人の秘密総裁府メンバーのうち、ジェルマンがこの五月八日の会議に出席しなかったのは、尾行が付いていたから。またマレシャルは「平等派宣言」(「証拠書類 七」)を書いたフロレアル初め(四月二〇日)頃を除いて、陰謀の最終段階では会議には欠席が続いていた。マサールとロシニョル、そしてグリゼルは軍事委員会メンバー。ドゥルエ以下ジャヴォーグまでの四人は山岳派委員会からの出席であった。

〔5〕リコール宅(七日)、ドゥルエ宅への手入れ(八日)以外にも、九日には第七区工作員のフイケが逮捕され、マレシャル

への尾行といった事実があった。にもかかわらず、九日夕方には軍事委員会と区工員員の合同会議がマサール宅で、そして一〇日には最終的な決断を下すべき全体会議がデュフル宅で開催されることとなっていた。

[6] グリゼルが言うこの金銭は、密告への代償ないし当座の資金としてカルノーから与えられたものを念頭においていると考えられる。カルノーはフロレアル一七日（五月六日）にアシニャ紙幣で一万フランを、数日後には五万フランをグリゼルに手渡していた。「証拠書類 二二」でグリゼルが挙げる金額も同様か。グリゼルは「陰謀」発覚後の五月一四日にさらに四万フランを受け取った。

[7] 蜂起の攻撃目標は、両院、総裁政府の置かれているリュクサンブル宮、軍司令部、省、およびグルネル兵営とヴァンセンヌ兵営とされていた。ダルテのメモなどによれば、ルーヴル宮とモンマルトルに置かれていた手旗信号所、国庫、ムードン（パリ南西郊）にあった大砲基地、グルネルの弾薬倉庫、フイヤン兵器廠の大砲およびマスケット銃も対象であった。

[8] 総動員 *J'avais en l'histoire*。こうして想起されているのは、九三年八月二三日のデクレによる兵士徴募。九三年二月二四日の「三〇万人動員令」に続き、国民公会はサン・キュロットの要求に応じて、革命防衛の対外戦争および国内での反革命、ヴァンデの暴動に対応するため、八月二三日のデクレによって一八歳から二五歳までの独身男性および子供のいない寡夫を徴用することとした。三〇万人程度が徴募されたが、医師による捏造証明書によって忌避する者や反革命側に加わる者もあった。共和主義者の主張する国民皆兵制、義務兵役制の端緒。既婚男性は武器を製造し、女性は病院で奉仕し、子供は古布から包帯を作り、老人は専制支配者への憎しみを教える、とされていた。

[9] このときドゥルエとダルテのみ残っていたが、ワインを飲み交わしていただけであった。

[10] この日（九六年四月三〇日）政治軍事会議が開催され、グリゼルも呼ばれて、秘密総裁府のメンバーたちに初めて会った。第四章「共和暦第四年フロレアル一日の政治軍事会議」の項を参照。

[11] 四月末から「陰謀」発覚直前までのパリの民衆の世論の動きを、警察が集めた情報をまとめた A. Aulard (ed.), *Paris..... op. cit.*, t. 3, 1899, Cerf, pp. 157-178 によつてたどってみるとほぼ以下の通り。四月二八日の報告（以下、同じ）——昨日の世論の関心は警察隊と海軍省での火災とに集中。一九日——午後九時頃、土地手形の価値に対する不満からボノン・ト・シャンジュ橋の下にかなり多数の労働者が集まったが、騎馬隊によって解散。警察隊解散はもはや大きな話題とならず。三〇日——通貨に対する関心。警察隊はもう話題とならず、叛乱兵が軍法会議にかけられることを疑わず。五月一

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（一八）

日——土地手形の価値下落、食料品価格の高騰に関して当局の無策に不満。二日——通貨問題についての当局の毅然とした方針が平静さを回復させることに。ジャコバン派やパンテオン派という名の世論壞乱者たちが、警察隊叛乱の背後に。三日——通貨問題。国有財産売却に関する措置に批判。公共広場での集会では食料品価格、失業、政府への不満や中傷が語られているが、そこにはキャフェ・クレティアンやキャフェ・デ・パン・シノワの常連たちの影響力が認められる。それらのグループでは、何らかの陰謀complotが考えられている模様。四日——投機師に対する厳しい措置が必要。監視の目を逃れている無分別な革命家たちが闇で陰謀を企てている。五日——五〇〇人院が下した、一万リーヴルおよび二〇〇リーヴル紙幣の廃貨に関する決定（翌日、元老院によって却下）に対する不平不満の声。六日——投機師たちに対する怒りの声、ただしこれは銀行家の手先が動かした人びとによるもの。七日——通貨価値不安に乗じた投機師たちの暴利、食料品価格が倍近くに高騰。キャフェ・デ・パン・シノワでの集会について、入り口が警備されているが、その中では当局が罵倒され、政府に反対する怒りの声。八日——共和国の財政に、また国有地の売却に関心が集中。通貨価値の下落、投機師たちに対する政府の優柔不断な対応に苛立ちと怒り。九日——パリの平静さは表面的なものにすぎず、労働者の不満、生活難、集会、苛立ちから、ブレリアールの再現が迫っている、との観測。総裁政府に対する蜂起・攻撃に関心が集中。

以上からすると、警察は、通貨危機と投機の世論に対する影響、キャフェ・デ・パン・シノワなどで観察される革命家たちの動きに強い関心を示していた。特に九日の報告では危機感を呈しているが、本文にあるような「日増しに高まる騒乱状態」を裏付けるような記述は見られない。

- [12] ルーエルLoud。不詳。オリジナル版の段階からアナグラム（語転綴）ではなくこの綴りLoudで示されるこの名前は、やや奇妙なことであるが、諸種の革命史事典にも、議会人名事典にも、ルグランの著書（Robert Legrand, Babeuf et ses compagnons de route, op. cit.）にも表れない。

- [13] 革命委員会 Comités révolutionnaires（革命監視委員会 Comités de surveillance révolutionnaire と同）。一七九二年冬以降、国の内外での動きに対応してパリのセクションで反革命に対応する革命委員会ないし監視委員会が設置された。国民公会は九三年三月二一日のデクレによって革命監視委員会を合法化するとともに、各コミューンにも設置を求めた。それぞれ一二人で構成され、外国人の調査を任務としていた。九月一七日に「反革命容疑者法」が制定されると同時に、この委員会は、反革命容疑者のリスト作成を達成し、場合によっては条件付きで反革命容疑者を逮捕する任務をも帯びた。共和暦第

証拠書類 二〇

自由

平等

共同の幸福か、しからずんば死を

フランクリン・ブルの手紙の筆者から、蜂起総裁府の共和主義的仲間たちへ⁽¹⁾

共和暦第四年ジェルミナル二六日〔九六年四月一五日〕

共和主義的仲間たちよ。あなた方が私を信頼して、D・T・Hを介して私に与えてくださった指令書〔証拠書類

一〇〕を参照⁽²⁾と補助工作員 agent secondaire 証とを、私は言い尽くしがたい喜びをもって受け取りました。私の才能によってではないにしても、少なくとも私の熱意、粘り強さ、勇気、そして何よりも秘密保持によって、あなた方が

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（六）

二九 (391)

二年フリメール一四日（九三年一月四日）のデクレによっていっそう権限を拡大強化した革命委員会は革命政府に組み込まれて、公安委員会および保安委員会の監督下に置かれた。恐怖政治期に行き過ぎや恣意があったことから、テルミドル後の共和暦第二年フリュクティドル七日（九四年八月二四日）以後、縮小され、九五年憲法の発効とともに姿を消した。

〔14〕 方面軍への代表委員 commissaires aux armées。九三年夏以降、公会が方面軍に議会権力の代表として議員を派遣し、ほぼ全面的なコントロールを行なわせた。総督 procoursu と呼ばれた代表委員は、徴発を実施し、將軍を解任し、特別税を徴収する権限をもっていた。総裁政府の下でも、共和暦第四年ブリュメール二二日（九五年一月一三日）に方面軍代表委員を設置。当初は監視のみであったが、やがて休戦協定を結び、軍事税を徴収し、略奪を鎮圧する権限をも帯びた。

〔15〕 「共和暦第三年憲法」の第二七五条は「公の武力 force publique は絶対的に服従的である。軍隊は討議する deliberer とはできない」と規定していた。

私について抱いてくださった意見が正しかったことを近いうちに証明できると思っています。

私には、八年間住んでいるバリについて私が個人的に知っていることに加えて、七年間にわたって、とりわけこのたびの戦争が始まって以来の戦闘を通じて、^① 観察者として私があらゆる点から検討した、軍隊の心的傾向についてのいっそう貴重な知識があります。私は、こうした知識に基づいて以下のように考えるべきだと思っていますし、それらをあなたの方のご賢察に委ねる次第です。

八九年に軍隊を蜂起させたのと同じ刺戟が、今日の新たな蜂起についてもなお有効に役立ちうる、と考えるのはまさに思い違いです。その「軍隊」機構は別の形をまもっているのであって、それゆえ、その機構を動かすには別の手立てを整える必要があるのです。以下にその理由を説明しておきます。

確かに君主政の下では、兵士は今日ほどの隷属状態にあったわけではありません。しかし彼は自分が隷属状態にあることを知っていました。彼の将校たちが隠すことなくそのことを彼に言っていたからであり、また、絶えず、何ひとつおろそかにすることなく、そのことを彼に思い起こさせていたからです。将校たちと兵士との間に存在したとても大きな隔たりが、兵士に対して彼の卑しめられた状態をあまりにも激しく意識させていたのです。

その結果八九年には兵士は、当時は混乱したイメージしか抱きえなかった自由と平等とに対する愛からよりも、はるかに将校たちに対する憎悪から人民の大義に味方したのです。しかもその憎悪の爆発は、長い間抑えつけられていただけにいっそうすさまじいものだったのです。この憎悪、この酵母は当時、わが国の軍隊を叛乱させた唯一のたとまでは言えませんが、少なくとももっとも強力な動機でした。この真実はあまりにも明白なものであって、疑いを差し挟むことはできません。

今日ではすべてが違ってきます。上級将校のみを別として、ほぼすべての将校が、生きていくだけの俸給しか受けていない元兵士で構成されていますし、その俸給たるや、大隊長について見れば、一日当たり実質約八スーなのです。そ

れゆえ、大尉その他、大部分の将校が、彼らの「配下たる」兵士たちの共同食堂で食事をとらなければならず、したがって、兵士たちときわめて親密な関係を結ぶことを余儀なくされています。兵士と将校との間のこうした貧困の平等が、八九年以前には存在していなかった、お互いの間での友情や愛着や信頼関係をもたらしているのです。その結果、どんな人間もそうですが、自分の境遇を他人と比較して判断することになった兵士たちは、自分の「上官たる」将校たちのことを考えても、彼らとの違いがあまりに少なく、彼らをさほど羨むことはできないと思うようになっていきます。他方将校の方は、近いうちに境遇が改善されるという希望を抱かされているのであって、兵士にもこのほかない希望を共有させているのです。このことが、彼ら「兵士と将校」を慰めていますし、また、彼らをお互いに無気力な麻痺状態の中で眠り込ませているのです。その上、今の市民の状態「市民生活」は、彼らが目下マスケット銃の下「戦場」で経験している境遇よりもはるかにひどい境遇を大部分の軍人に対して提供しているのです。こうした状況は彼らを盲従的に隷属させることにはほとんど役立っていないのです。

しかし、全員がロボットであるわけではない将校たちの間で、彼らの同僚に誤りを悟らせる者が見当たらないのはどうしてなのだろうか、と言う者が出てくることでしょう。どうして、ですって。その理由は単純なものです。つまり、自由に対する真正銘の愛に基づいて、またそうした愛に基づいてのみ、武器を取るにいたった人びとはすべて、そうすることが可能である限りは、テルミドル九日以来、別の言い方をすれば、彼らが防衛しようとした大義が覆されて以来、軍務を退いたからなのです。引退できない事情から、何人かがまだ残ってはいました。けれども、本質的に従順な人間しか望んでいない総裁政府は、新しい軍隊編成に関する今月「ジェルミナル」六日（九六年三月二六日）の命令「アレテ」によって、まだ残っていた人びとに引退を迫ったのです。それゆえ今では、地位も才能も資産もなく、隷属状態の中で年老いてしまい、彼らにとって可能な幸福の最上のもの、*le plus ultra*と見做す肩章を失いかねないという心配ゆえに、背くことのできない人間しか、また最後に、国王支配の下で、袖にウールの階級章を運び、兵士たちを

サーベルの刀身で叩くことを名譽あることと考えていた人間しか、もはや将校にはいないという結果になっているのである。まさに以上が、現政府にとって今日好都合な将校たちの状況です。

兵士一般について言えば、彼らはもはや、九二年および九三年に見られた、自由の熱烈な擁護者ではありません。そうした兵士の大部分は戦場で倒れてしまいました。残っている兵士の大多数は、徴用された田舎の人間たちであって、ガレー船の中で働く徒刑囚と同じように自由に奉仕しているのです。四〇〇人の兵士からなる大隊にはたいいてい、少しばかり読み書きのできるのはいせいで四〇人しかいません。少しばかり教育を受けた都市の若者たちは、ほぼ全員が軍務を免れる手段を見つけました。兵士（今なお義勇兵と呼ばれています）の大部分が抱いている願いのただひとつの目標は、繰り返して言うておきますが、彼らの願いは、すぐにでも郷里に戻ることです。

しかも請合うことができますが、革命にはほとんどこだわっておらず、自分たちの村のお菓子と引き換えに共和国を引き渡すような兵士が何千人といるのです。しかしまた、逆にわれわれには、職業としての兵士であり、またそうである定めにあつて、どのような政体の下であろうと、彼らの使い方が分かっていけば、あらゆることに向いている兵士が約三分の一います。彼らは大部分まさしく勇ましい兵士であつて、かれらの影響力によつて臆病者と無氣力者を率いています。これらの兵士を運動に引き入れるにあつて、彼らには立派な演説も長い演説も必要ではありません。ワインと略奪の期待とで十分なのです。これら二つの事柄がない場合には、彼らからは何も期待してはなりません。公会はいくつたり方をよく弁えていて、ヴァンデミエール一三日（一七九五年一〇月五日、第二章訳注〔36〕）を参照にそれを上手く用いることができたのです。

騎兵隊、とりわけ竜騎兵や軽騎兵や鎗歩兵はおおむね、私がつい先ほど話した最後の部類（勇ましい兵士）に属しています。

以上のような全般的な考察に基づいて、私の考えによれば、念願の全般的な復活を遂行するにあつて採用すべきで

ある、と思われる手段についてその概要を描くことにします。

一、私たちの文書や演説の中で、將軍たちや彼らの參謀本部は徹底的に攻撃するが、下級將校には手加減を加えること、

二、部隊の解体を煽るとまでは言わないまでも、後になってから必要があれば解散させるように、少なくともできる限り不服従行為を煽ること、

三、金持ちたちへの略奪のことと完全な除隊のことを同時に話すこと。そうすれば、状況に応じて約束の履行を巧みに避けることができるでしょう。しかし、絶対的な平等についてはあまり語り過ぎないこと。なぜなら、暴動員（*Chouans*）については反革命王党派の意）である彼らの上官が、ずっと前から兵士たちの心にこの「平等の」体制に対する警戒心を抱かせてきており、その結果彼らは、この体制が不可能とだけあって、その体制が王政主義者を見分けるための確実な目印であるとさえ一般に考えているのですから。このことは奇妙に思われるかもしれませんが、とにかく事実なのです。そして、

四、最後に、大事業を行なう日が近づいてきたときには、私の考えでは、兵營近くの居酒屋でいろいろな種類のダンスパーティを設けることがきわめて重要であるように思われます。そこに兵士たちが引き寄せられ、またそこで兵士たちに酒を飲ませることによって、彼らの精神を必要とされる高みにまで巧みに引き上げるからです。

共和主義的な仲間たちよ。私が以上のような考察をあなた方に提出しているのは、あなた方の意見を求めるためです。私の意見が従うのに適していると判断なさった場合には、その旨お知らせくださるよう。これから私は『義足（木の脚）とフラン＝リールとの対話』と題する作品に取り組むつもりです。この対話は、九二年に兵士が享受していた境遇と比較した際の、兵士の貧困ぶりと彼の現在の卑しめられた状態とをめぐって詳細に展開されるでしょう。

兵隊風の文体で書かれるこの作品のすぐ後（時間が許す限りすぐ後）に、『テルールからフラン＝リーブルへの回答』と題されるもうひとつの作品を続いて書くつもりでいます。

私は、指令書を幾度も繰り返して読みました。そしてその指令を深く理解し、その指令にきちんと従うために、さらに読みなおすつもりです。

敬具⁹

訳注

- [1] この書簡は『バブーフ宅押取文書』にも収録されている。それにも「共和暦第四年ジェルミナール二六日」という日付があり、この日付について「バブーフの筆跡と思われる」との編集者の注が付されている。受け取った日付を示すのであろう。*Pièces saisies, op. cit., p. 42.* そのことから、グリゼルがこの書簡を書いたのはジェルミナール二四ないし二五日（九六年四月一三ないし一四日）と推測できる。なお、「フラン＝リーブルの手紙」とはグリゼルが書いた「証拠書類 九（シルコ＝パリジエンヌ軍の兵士であるフラン＝リーブルから、ライン方面軍の兵士である、その友ラ・テルールへの手紙）」を指す。
- [2] ダルテ Darthe を指す。
- [3] グリゼルの経歴については、第三章訳注〔22〕を参照。
- [4] 今月〔ジェルミナール〕六日〔九六年三月二六日〕の命令〔アレテ〕と記されているが、J. B. Duvergier, *Collection complète des lois, décrets, ordonnances, règlements, ains du Conseil d'Etat, publiée sur les éditions officielles du Louvre; de l'imprimerie Nationale, par Baudouin ; et du Bulletin des lois, tome 9, Paris, Chez A. Guyot et Scribe, 1835* に「この法律の法令名は見当たらない。」
- [5] ウールの袖章 *galons de laine*。山形の袖章は素材としてはウールのみであって、伍長および上等兵、そして下士官が帯びた。なお、肩章の素材は金、銀、ウールの三種類であって、階級章ではウールのものは伍長を示し、下士官のものは金あるいは銀素材であった。職務章の点では需品係下士官は金あるいは銀を、ラッパ手や鼓手はウールを素材とするものであつた。

た。Dictionnaire militaire. Encyclopédie des sciences militaires. Librairie militaire Berger-Levrault, 1898, vol. I, p. 1401.

[6] 義勇兵 volontaires。義勇兵という名称が用いられていたが、大部分は徴募兵 conscrits であった。国王一家のヴァレンヌ逃亡事件とピルニッツ宣言の後に、憲法制定国民議會は国民衛兵隊員の中からくじ引きによって「義勇兵大隊」を編成。しかし質量ともに不十分なものであった。九二年七月一日の「祖国は危機に瀕す」の宣言とともに、立法議會は新たに国民衛兵の間から「共和暦第一年の義勇兵」を編成し、これがヴァルミおよびジェマップの戦勝につながった。九二年末の国民公會による「総動員 levée en masse」(第五章訳注 [8] を参照) によって近代的な徴兵制の基礎が築かれた。九三年二月の公會のデクレに基づき、九四年一月一〇日から義勇兵と旧体制下の国王軍を基礎とする戦列部隊 armée de ligne との混成 (アマルガム amalgame) が図られた。

[7] 復活 résurrection。再生 régénération の意味で用いていると思われる。「証拠書類 五 (二人の主要工作員および中間工作員の組織化。各工作員の基本的諸任務)」の訳注 [1] を参照。

[8] グリゼルが自ら書いた「証拠書類 九 (シルコ＝パリジエンヌ軍の兵士であるフラン＝リールから、ライン方面軍の兵士である、その友ラ＝テルールへの手紙)」に対する回答、という体裁を意識したタイトル。この作品も、直前の『義足「木の脚」とフラン＝リールとの対話』なる作品も、フランス国立図書館 BnF には所蔵されず。グリゼルの作り話と思われる。

[9] 『バブーフ宅押収文書』には、この結語以下に八行分の記述が追伸の形で存在する。

「追伸——夜の二時になって、ろうそくが足りません。それゆえ、この手紙の中でいささか乱筆・乱文となってしまいました。時間のせいで、したいと思うようなことができないのです。

お金がまったくかからないことと、他の用紙を手に入れる方法がないことから、この用紙を用いました」。Pièces saisies, op. cit., p. 46.

[*1] この用紙とは、「自由、平等、共同の幸福」という字句の印刷された秘密総裁府のいわば公用箋 (『証拠書類 二二二』の冒頭を参照) を指すと思われる。

証拠書類 二一

フラン・リーブルから秘密総裁府その他へ¹⁾

フロレアル一七日〔九六年五月六日〕

私は、三〇日前からゲルネル兵營の私の同僚の間で仲間を見つけようとしてきましたが、無駄な努力でした。私はもうまく行かないのではとあきらめ始めていましたが、そのとき僥倖から、他にもいっそう信頼するに足る仲間たちをやがて見つけてくれるひとりの同僚が見つかったのです。

以下がその事実です。

昨日私は、私の大隊の中尉であるモンティヨンという人物（フランドル地方出身の元兵士で、演説と軍事の才能がある人物）とお酒を飲んで夕食後のひと時を過ごしました。私はずっと前から彼が正しい信条をもっていると推測していました。そのことを探るために彼を遠くに連れ出したのです。政治一般について長い間話し、彼に喋らせるためにかなり飲ませた（彼はもちろんとても口が堅いからです）後で彼は、自分が終始一貫して民主派であったが、しかし共和派がすぐに決起するのを目にする希望を失ったのであり、したがって自分とフランドルのかつての仲間たちは、やむなく政府支持に見えるふりをしているのだ、と誠実さを確かに示しつつ胸襟を開いて私に打ち明けてくれたのです。私はこの機会を捉えて、彼の勇気を褒め上げました。そして、私も同じ考え方を表明していることを彼に打ち明けて、四万人以上のサン・キュロットがまさに立ち上がろうとしていること、また、彼ら（サン・キュロット）はわれわれと、すなわちわれわれ政府の兵士たちと戦わざるをえないことを懸念していなかったならば、すでに専制支配者たちを打ち倒していたはずであることを、私は事実に基づいて知っている、と彼に述べました。

私はさらに、それでもあらゆることからして、彼らサン＝キュロットが近いうちに蜂起すること、そして（一七九二年）八月一日〔第一章訳注（一）を参照〕のスイス人兵士たちと同じようにわれわれも確実に犠牲者となることが予測される、と言い添えておきました。私はそれ以上のことは話さなかったのですが、私たちの間で次のような結論を得るのに十分でした。（一）彼が今日、彼が熟知している三人の友に会い、決定的な時期に人民を擁護するよう部隊に備えさせるよう彼らに勧めることになっています。（二）彼はまた、彼ら三人には私のことを知らせることなく、彼の友たちを私に知らせてくれることになっています。（三）彼は、すでに四〇〇〇人の味方がいると、しかし裏切りの効果を避けるために四人ごとにししかお互いに知らないということに取り決められていると、彼らに話し（大事なことです）、請合うことになっています。（四）ざっと計算して、その数は一五ないし二〇人に上るでしょうが、そのうち将校は三人のみ（もっとも近づきにくい階級ですから）です。この小さな中核が形成されたときには、私は兵士を仲間引き入れ、不服従運動を拡大させるために、彼らの一人ひとりにアシニャ紙幣で約一〇〇〇フランを渡すつもりです。このお金をどこで手に入れるか、以下に記しておきます（私の考えるところ、金銭は重要な手段なのです）。（一）私には、アブヴィル（ソム県）にいる私の兄弟のひとりに託してある、アシニャ紙幣で三万五〇〇〇リーヴルのお金があります。私はそのお金を送ってもらうつもりで、すでに手紙を出してあります。（二）私には、公証人であるボンテイクールという名の本いとこがサント＝クロワ＝ド＝ラ＝ブルトニエール街（現在の第四区、マレー地区）にいます。非常な金持ちで、したがって大の王政主義者なので、彼とは滅多に会わないのですが、彼の言うところでは、私が大尉というよりもサン＝キュロットのように見えるので、今の私とは別の装備を整えさせるためにお金を貸そうとよく申し出てきていました。私は常にその申し出も彼も無視してきましたが、だからといって、彼と仲違いすることはありませんでした。彼の父親に対するある種の尊敬などがあったからです。私はこのいここに会って、私が陸軍局 bureau de guerre に職を得たばかりである旨報告し、装備を整えるために一万フラン貸してくれるよう彼に頼むつもりなのです。彼は大喜び

で貸してくれるでしょう。

原注

(1) この手紙は裏切り者グリゼルの手になるもので、彼は、民主派の試みを密告したとき（フロレアル一五日（九六年五月四日））よりも後でこれを書いた。

訳注

[1] この手紙は『バブーフ宅押収文書』にも収録されている。手紙の上部に「フロレアル一七日」という日付が記されており、この日付について「バブーフの筆跡と思われる」との編集者の注が付されている。受け取った日付を示すのであろう。
Pièces saisies, op. cit., p. 46. したがってグリゼルがこの手紙を書いたのは五月五日前後と推測される。

[2] オリジナル版、エディシオン・ソシアル版ともに、フランクリン（＝グリゼル）とモンティヨンなる人物との対話からえられた結論が示されている箇所には、(1)のみがあつて、続きの番号が欠けている。訳者の判断で続きの番号を(1)で示しておいた。

[3] この金銭の出所について、第五章訳注 [6] を参照。

証拠書類 二二

新しい蜂起文書^[1]

この文書は、以下の変更箇所を除いて、「証拠書類 一五〔公安蜂起委員会から人民へ 蜂起文書〕」（前号に所収）と同じである。

第四の理由〔に鑑みて〕と第五の理由との間に、以下のような文言を追加。すなわち、

「国民公会が解散されたことは一度としてなく、反革命的徒党の暴力と専制支配的意図によって四散させられたにすぎないこと、公会は今でも法的に当然のものとして存在していること、また、人民によって、また人民の民主政的憲法に従って、自由に選出された立法府によってのみ公会は置き換えられうることに鑑み、」という文言を追加。

第一〇条と第一一条との間に、第一〇条となる以下の条文を挿入。

「公会が直ちに招集され、その職務を再開するものとする」。

以後の条文の番号はすべてひとつ数を送る。

第二二条となる〔旧の〕第一一条の末尾に、以下の文言を追加。

「公会のメンバーは特別の標章によって識別されるものとする。それは、帽子の山の周囲に赤い色のカバーという標章とする」。

第二〇条となる〔旧の〕第十九条の代わりに、以下の条文を置く。

「国民の権力機関から権利侵害者たちを排除したことに起因する、代表機関内部での空席に鑑み、また、第一次会という手段を通じて人民が信頼するに値する選択を現時点では行なうことができないという理由から、公会には直ちに、きわめて明白な民主派の中から、とりわけ専制支配の打倒にきわめて積極的に協力したとされる人びとの中から選ばれる、一県につきひとりのメンバーが加わるものとする。その名簿は、人民のうちに蜂起の主導権を執る部分の代表たちによって提出される」。

訳注

〔1〕 この文書の作成時期は明示されていないが、山岳派委員会との提携に関する交渉経過（本章「秘密総裁府は山岳派との提

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（六）

携を決定」以下の項(前号)を参照)からして、九六年五月四日ないし五日のことと推定される。

(2) 実際には、あるいは正しくは、第一条。単なる不注意によると思われる。

証拠書類 二三

草案¹⁾

平等

共同の幸福

自由

蜂起公安委員会は、

人民が長い間にわたって空しい約束に惑わされてきたこと、また、今や革命の唯一の目標である人民の幸福にとって必要なものをついに効果的に与えるべき時期であることに鑑み、

今日の厳かな蜂起が、あらゆる種類の抑圧をもたらす不連続の源である貧困を永遠に絶滅するべきであることに鑑み、
以下のように命令する。

第一条 蜂起が終わったときに、現在劣悪な住居に住んでいる貧困な市民は、彼らのいつもの住居に戻ることはない。

彼らは直ちに、陰謀家たち *conspirateurs* の家屋に身を落ちつけることとなる。

第二条 前条の金持ち宅から、サン＝キュロットたちに快適な家具をあてがうために必要な家具を取り上げる。

第三条 バリの革命委員会は、本命令の迅速かつ適切な執行に必要なあらゆる措置を講ずる責任を負う。

訳注

[1] 『パブーフ宅押収文書』では「ブオナローティの筆跡と確認される」との編集者の注記がある。Papiers saisis, op. cit., p. 150. なお、エディシオン・ソシアル版には「金持ち宅に貧困者の住居を提供する件」という副題が付されている。日付については記載がなく、不明。

証拠書類 二四

部分稿 人民裁判に関する命令案

蜂起公安委員会は、

不誠実な受任者〔議員〕たちおよび国民主権に対する侵害者たちの処罰が、蜂起した部分が人民全体に対して負う最高の義務であることに鑑み、

裏切り者たちだけを恐怖させるような、また、パリの民衆に対して中傷を加える口実すべてを平等の敵たちから奪い取るような方法で、この処罰が加えられるべきであることに鑑み、

以下のように命令する。

第一条 両院および総裁政府の構成員たちによる権利侵害と専制支配とは明白である。人民主権に対する侵害者は、法^①によって死刑を課せられる。

第二条 蜂起した人民によって設置される委員会が、上記の個人々人を審問する。

第三条 この委員会は人民の前で審理を行なう。委員会は、蜂起委員会もしくは蜂起委員会が選任する訴追官の意見を

平等をめざす、いわゆるパブーフの陰謀（一八）

聴取した後に、背任罪に問われた者を人民の寛大な処置を求めるよう、勧告する正当な理由があるかどうか、宣告する。
 第四条 セクションごとに、また、指定されることとなる形で集会を開く蜂起した人民が、要求された寛大な処置を承認するか、あるいは拒否する。

第五条 両院の現在の構成員である市民……たちは、人民の信頼に値する。彼らは、人民の特別な保護の下に置かれる。
 第六条 裏切り者たちの処罰を迅速に行なうために、各区の工作員はセクションごとに四人の市民を選任〔バリ全体では一九二一人〕し、集会を開いた人民の承認に供する。

第七条 本委員会は六部に分けられる。各部は二二人のメンバーで宣告を行なう。その他のメンバーは欠席者の代理を務める。最年長者が委員長を務める。各部門の構成はくじ引きによって決定される。

第八条 ……〔空白〕……

原注

(1) 一七九三年の「人権宣言」第二十七条〔同条は「主権を侵害する個人はすべて、自由を求める人びとによって死刑に処せられる」と規定〕。

証拠書類 二五

〔通達〕 総裁府から工作員へ^①

あらゆる措置が講じられた。他方、専制支配者たちの犯罪はもう我慢ならないものとなっている。それゆえ蜂起しな

ければならない。

以下は、われわれが諸君に対して厳密に従うよう命じる、命令および指示である。

第一項 明日朝 時に、諸君の区のすべてのセクションで警鐘を打ち鳴らさせ、また、諸君が手に入れられるかぎり数多くの喇叭を街頭で鳴り響かせること。総司令官が、喇叭の保管場所からそれらを奪取することができれば、蜂起開始後に諸君の許に届けることとなる。小隊が、あるいは少なくとも区〔の部隊〕が進軍するに際しては、喇叭の先導を受けることが得策であろう。

第二項 同時に、われわれが諸君に宛てて送る宣言文を大量に貼り出させ、流布させ、また、前以て諸君が通知してある諸君の配下を用いて、人民大衆を立ち上がらせること。^①

第三項 総裁府は、蜂起の間、人民を指揮する将官として以下の同志 *citoyens* を選任した。すなわち、……^②

まずわれわれが選任した下級将校に、次いで人民全体に彼ら將軍を承認させること。そして、彼らの命令が厳密に守られるよう留意すること。

第四項 諸君の各区における市民たちの名簿が別途添付されているが、^③彼らは諸君の伝えてくれた情報に基づいて、人民の諸権利の獲得に向けて人民を指揮するのにきわめて適しているとわれわれが考えた人びとである。人民は小隊に分けられ、彼らの一人ひとりが各小隊を指揮するものとする。隊長に指名されている市民が区を指揮し、副隊長はセクションを指揮するものとする。

第五項 直ちに区の隊長たちに通報し、彼らが従わねばならない將軍の名を彼らに知らせ、また同時に副隊長に対して態勢を整えるよう、ただしそれ以上のことは何も言わずに、通知することを隊長たちに厳命すること。諸君が大いに信頼している小隊指揮官たちにも同様の通知を行なうこと。彼ら以外の人びとにはそのときになって初めて通知する

こと。諸君が疑いの念を抱くかもしれない小隊指揮官を使うかどうかは、諸君の自由である。

第六項 宣言文の中で指定されている小旗を隊長、副(中)隊長、そして小隊指揮官に渡すこと。

第七項 彼らに対して、副官宅およびセクション本部にある武器・弾薬を直ちに、かついかなる犠牲を払ってでも奪取するようすること。

第八項 将官の命令を実行できる態勢を整えられるよう、志願してくる砲兵すべてを部隊にまとめること。

第九項 人民に対して演説し、人民を奮い立たせる役目を任せる精力的な愛国者を選び出すこと。

同時に女性の悲壮で説得的な雄弁さを利用すること。以前の指令において諸君に示したように、彼女たちを兵士のところへ案内すること。彼女たちは彼女たちが用いうるあらゆる力強い配慮を通じて、兵士に人民の隊列と一体になるよう勧めつつ、兵士に公民冠を差し出す。

第一〇項 興奮状態が始まって直後から、ゲルネルおよびヴァンセンヌ野営基地の部隊がすでに人民の側についた、という噂を広めることによって、その興奮状態を煽ること。

兵士たちが人民と友好関係に入ったときには、彼らがサン＝キュロットの隊列に合流することが必要であり、また、部隊としては行進せず、彼らの将校の指揮に従って行進しないことも必要である。

第一一項 政府の命令に、しかも国民衛兵隊の将校の指揮の下で賛同しようとする諸個人すべてを連行あるいは武力で蹴散らす命令を、隊長や指揮官に与えること。いかなるものであれ現在の権力機関の命令を伝達する騎馬伝令兵あるいは使者はすべて逮捕すること。

第一二項 諸君の担当する区の大衆の動きを追ひ、彼らを味方につけるよう配慮すること。献身と勇気の模範を示すこと。そして、一五分ごとに急使を使ってわれわれに状況を報告すること。

第一三項 将軍が諸君の担当する区の大衆に分割を命じたときには、もっとも大きな部分につき従ひ、別の部分に対す

る監督は献身的な市民に任せること。その市民の名前を直ちにわれわれに知らせ、かつ、彼に対して一五分ごとに同様にわれわれに報告を行なうようにとの命令を与えること。

第四項 諸君に何か事故があつた場合に諸君に取って代わるように、諸君がもっとも信頼するサン・キュロットに諸君に対する指令をすべて伝えておくこと。

第五項 われわれ〔総裁府＝蜂起委員会〕の命令によって、テルミドール九日まで職務に就いており、もっとも純粹さを保持している、諸君が担当する区の各セクションの革命委員会の三人のメンバーに対し、最初の警鐘が鳴つたら職務に復帰するよう命ずること。彼らがいない場合には、諸君が他の愛国者たちを選び出し、諸君と一致協力して蜂起文書の実行のためにあらゆる措置を講ずる任務を彼らに負わせること。彼らはとりわけ、パン屋と人民に与えるべき食糧に関する条項〔証拠書類 一五（蜂起文書）〕第一四および第一五条〕に取り組まねばならない。

第六項 また、彼らに対して、食糧や弾薬や負傷者の運搬に必要な馬、雄ラバ、そして荷車を直ちに徴発するよう命ずること。

小麦粉屋を占拠する際には、諸君は直ちにそこに倉庫見張り番を設け、周辺のパン屋に休みなく食糧を供給させるよう配慮すること。

第七項 蜂起の際には、諸君の区の武装した、きわめて固い決意のサン・キュロットを一〇人、われわれのもとに送っていただきたい。彼らは命令を伝えるのに役立つであらう。そして、窮地に陥つた場合にはわれわれは彼らとともに、自由の廃墟の下に埋もれることとならう。

第八項 蜂起総裁府は（フオブル・（・街）番地）で会議を開催する。

第九項 国民公会は蜂起総裁府によって、蜂起開始直後に〔同じくフオブル・（・街）番地〕に設立される。公会の存在を知らせること。

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（六）

四五（407）

第二〇項 市門の警備のために将官の発する命令が厳密に実行されるよう留意すること。そして、橋の警備を行い、現在のさまざまな権力機関の間での連絡を遮断するよう、十分に気をつけること。

第二一項 国民公会への追加議員となる民主主義者の名簿の提出に協力させるために、また、直ちにわれわれによって提案され、不幸な市民をただのひとりも残すことのないように練り上げられた、人民的で再生を目差す諸法律を支持するために、初期〔の勝利〕を利用して、各区の人民を大挙してわれわれの許に赴かせること。¹⁰⁾

訳注

〔1〕『バブーフ宅押収文書』によれば、この文書の冒頭には「通達 circulaire」および「バリ、(……)、共和暦第四年」との記載があるが、日付は入っていない。その筆跡は「ブオナローティと確認される」との編集者の注記がある。*Pièces saisies, op. cit., p. 35.* また、『押収文書』はその筆耕(書記)ピエ・ピレ(第三章訳注〔31〕を参照)の筆跡と思われる同文の資料が六通あるとしている。*Ibid., pp. 35-39.* ただしこの文書がまとめられている第六輯には、それら六通を挟んで、標語と題名のみ、文書が三通ある。その題名は「公安総裁府から一二区工作員に」と「蜂起公安総裁府から一二区工作員に」と微妙な相違があるが、そのうちの一通には「共和暦第四年フロレアル一四日(九六年五月三日)」という日付が入っている。*Ibid., p. 35.*

〔2〕オリジナル版もエディシオン・ソシアル版も全二二条で構成されているが、『バブーフ宅押収文書』では全二二条で構成されている。違いは二ヶ所あり、ひとつは、第三条と第四条との間に『押収文書』版では「第三条 同時に諸君は、両院と総裁府とが、バリを脱出し、この都市に軍隊を進め、フランスに国王を復活させようと望んでいる、との噂を広めること」が記載されている、という相違点であり、以下、条文の数はひとつ送りとなっている。いまひとつの相違点については、次項を参照。

〔3〕『バブーフ宅押収文書』版では、この後に「総司令官、少将、サン＝タントワヌについて」という三行が入っている。ただし選任された者の名は記載されていない。*Pièces saisies, op. cit., p. 36.*

[4] 別途の名簿。『バブーフ宅押収文書』には、この名簿に相当すると思われるものが収録されている。ただし、フロレアル一九日〔五月八日〕にバブーフ、ダルテらが作成した「指揮に適した人物のリスト」は、パリの四八セクション中二七についてしか存在しない。ひとりしか挙げられていないセクションも一〇に及ぶ。Ibid. pp. 5-13.

[5] 副官 *adjudant*。副官は一七七六年三月に歩兵隊内に設けられ、八〇年代にセギュール元帥（陸相）の下で一大隊にひとり配置。九一年には下士官 *sous-officier* という名称が付加された。少尉より下位の階級。ここでは、国民衛兵隊を構成する大隊の曹長のことを指すか。

[6] 以前の指令。『証拠書類 六（主要革命工作員ひとりひとりに宛てられた、秘密総裁府の最初の指令）』および『証拠書類 一〇（主要軍事工作員に宛てた、秘密総裁府の最初の指令）』を参照。

[7] 公民冠 *couronne civique*。古代ローマにおいて、生命を賭してローマ市民を守った愛国的な兵士に対して与えられた柏の葉とどんぐり状の柏の実でできた冠。

[8] 『バブーフ宅押収文書』の編者はこの項および前条第二項について、「バブーフによる文言追加と思われる」と記している。

Pièces saisies, op. cit., p. 57.

[9] 再生を目差す *regénérateur*。『証拠書類 五』の訳注〔1〕を参照。

[10] 『バブーフ宅押収文書』には、最後の数行分について、「バブーフの筆跡と思われる」との編集者注が付されている。*Pièces saisies, op. cit., p. 39.*

証拠書類 二六

勝利した人民に対する演説草案の部分稿¹

勝・利・し・た・人・民・よ。

市民諸君。聴衆の関心を引くためには、演説の主題としてきわめて重要な事柄が必要であるとはいえ、これから演説

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（六）

することとなる私ほど、演説者が注意深く耳を傾けられるべきことはかつてなかった。私は再度こうした傾聴を要請しておきたい。幸福な人民よ。われわれを晴れやかにしてくれているこの日の名において、注意深く聞くよう、また、予めその心構えをしておくよう、私は諸君に求める。諸君に語らねばならない事柄は、諸君がたった今手に入れたばかりの感嘆すべき獲得物よりもはるかに重要であるということを知らせることによって、私は諸君の注意深さをさらに高めようと望んでいる。要するに、〔今〕語っている人間〔私〕および彼〔私〕が代表して語っている人びとに対する信頼が、耳を傾けている人びとの熱意の度合いをさらに高めることができると思えば、今諸君は蜂起公安委員会の代弁者に耳を傾けているのだということを知らせても、この目標からそれることはない、と私は思っている。

再び自由となった人民よ。抑圧から解放され、勝利した人民よ。遠慮することなく諸君の興奮に身を委ねたまえ。諸君を卑屈なロボットとしていた時代は過ぎ去ったのだ。(彼らとは違って) われわれは諸君に対して、賛成あるいは不賛成の態度を決して示さないように、と言うことはない。主権者たる人民よ。われわれが諸君を裏切るようなことがあれば、われわれの約束もまた今後(これまでの裏切り者たちの約束と同様に)、われわれの不実と犯罪の前触れとなるようなことがあれば、われわれが不実の犯罪を仕上げることは、祖国と自由の名において、放置してはならない。直ちにわれわれを非難し、われわれを処罰したまえ。

フランス人民よ。私は前置きとしてさらに、私は蜂起公安委員会を代表して諸君に語っているのであるが、この蜂起公安委員会のメンバーが誰なのか、ここで諸君に明らかにしておくことが適切であると思う。以下、彼らの名前である。

……

フランスよ。フランス全体が私に耳を傾けてくれている。われわれとともにフランスの最初の解放者となっている、私に耳を傾けている皆さん。私は、この偉大な日にふさわしい事柄、この偉大な日が明るみに出した素晴らしい勝利よ

りもはるかに興味深い事柄を語ること、諸君ならびにフランス全体に対して約束した。そこで私は、人民がもはやこの勝利の成果を失いえないよう人民に保証する事柄を述べ、提案することしよう。

私が訴えかけている相手はいつも人民なのであって、私は今もなおここでは人民しか目に入らない。「蜂起文書」の中で代表機関のことが述べられていたが、それはいまだまったく存在していない。その代表機関はいまだまったく承認されていないからである。それはいまだまったく存在していない。今なお蜂起している人民が自ら諸権利を行使しており、また人民の権力を前にそれ以外の権力はすべて消滅しているからである。それはいまだまったく存在していない。蜂起の成果がまだまったく収穫されていないし、また人民に対して保証されてもないからだ。市民諸君。この状況を上手く利用しなければならぬ。古くからの幻惑に欺かれてはならない。ここにいるのは諸君なのであって、ここには元老院の人間はひとりとして見当たらない。したがって諸君に対して、諸君に対してだけ、私は語ろうとしているのである。しかも、繰り返して言うておくが、諸君がそのことを深く理解しておくことは、役に、この上なく役に立つことなのだ。今が貴重な、ただ一度の好機なのであって、こうした好機はもう二度と現れることはあるまい。われわれの未来永劫の運命は、われわれがこの好機をどう用いるにかかっているのだ。

訳注

〔一〕 エディシオン・ソシアル版には「パリ民衆に対する蜂起委員会演説の草案」なる副題が付されている。『パブーフ宅押収文書』には、「パブーフの筆跡と思われる」との注記がある。*Pieces saisies, op. cit., p. 63.* 日付については記載なし。

〔二〕 オブライエン・ブロンテールによる英訳版 (*Buonarroti's History of Babeuf's Conspiracy for Equality*..... translated by Brontë (O'Brien), London, 1836, p. 413) は、この演説草稿の続きの部分は失われたか、あるいは未完であったか、との注を付している。『パブーフ宅押収文書』には「証拠書類 一八(山岳派委員会の使者に対する演説)をはさんでその次に収録されている、第三輯「文書 二二」は、この演説草稿に先立つ部分の一部をなすと思われる (Philippe Riviale, La

conjuratiō: essai sur la conjuratiō pour l'égalité dite de Babeuf, L'Harmattan, 1994, pp. 417-418 と同じように位置付けている) ので、オリジナル版にはないが、以下に訳出しておく。 Cf. *Pièces saisies*, op. cit., p. 66.

〔勝利した人民に対する演説草案の部分稿への補遺〕

私が行おうとしている演説は、ここで国民公会を自称している人びとに対してよりも、むしろ人民に対して向けられている。フランスの護民官 *tribun* が、専制支配者たちの毒牙から救うことに貢献した人びとの只中で語るといふ光榮に与るのは、これが初めてのことである。彼らがもう二度と専制支配に屈することがないようにするために、護民官が彼らに提示するさまざまな措置に、それに見合う十分な注意を払って聞いていただきたい。

市民諸君。今日の勝利は今後の幾つもの世代の人びとを驚かせるであろう。またその勝利はすでにヨーロッパの国々を揺るがしているし、世界を解放することとなる。しかし私は諸君に重要な問いかけをしなければならない。すなわち、諸君はその成果を失わないことを望んでいるのか、という問いである。

さあ。勝利を強固なものとする術を心得なければならない。

証拠書類 二七

兵士に対する声明^①

兵士諸君。永遠に祖国を救うか、それとも破滅させるかを決するべきときが近づいている。祖国が蒙っている災禍の

重みに疲れ、抑圧に憤激した人民が決起しようとしている。人民は専制支配を打倒するか、さもなくば自由とともに死ぬことを望んでいるのである。その通り。愛国者であるならば、人民の意思に反して築かれ、人民のもっとも熱烈な友たちの墓の上に、人民の諸権利の侵害の上に、そして人民的な法律すべての破壊の上に築かれた政府の存在にこれ以上耐えることはできない。人民の貧困がその極みに達しているのに、人民が自分の意見を聞いてもらう手段はすべて剥奪されている。人民にはもはや、自分たちの不満を支持してくれる協会〔クラブ〕も公開集会もない。²⁾ 両院と総裁政府は、大物や上品な人びとにはきわめて優しく人間味があるのに、人民に対しては血も涙もなく、聞く耳をもってもいないし、また信頼されてもいない。誰か人民のために発言したり、ものを書いたりすると、彼は投獄され、殺害される。その通り。専制支配がこれほど残酷で我慢のならないものであったことはかつてない。人民のために革命が行なわれたのであるが、その人民は統治者たちから自分たちの安全のために抑圧すべき、卑しい細民として扱われている。こうした極度の残酷さに対して叛逆する人びと、バスタードと王権とを打倒したあの人びとが、これらの統治者によって、弱者や無知な人びとを欺き、彼らをその人びとに対して武装させるために、王政主義者と呼ばれているのである。統治者たちは、まさにこの陰險なマキアベリズムによって、共和暦第三年ジェルミナルとブレリアールに彼らが行なったのと同じように、諸君を欺き、諸君を銃剣で切り殺せると思っているのである。諸君はサン＝キュロットなのだから、諸君と同じように王政を打ちのめした人びとと戦ってはならない。〔以下のこと〕に耳を傾けたまえ。そして欺かれてはならない。

人民が全員一致で受け入れたにもかかわらず、恐怖政治家という名目で愛国者たちが殺戮され、投獄されることを通じて、陰険にも人民が奪い取られた「一七九三年憲法」を人民は望んでいる。

人民は「一七九三年憲法」を望んでいる。富の差別をすべて廃止することによって、すべての人間を平等なものとするからであり、祖国の防衛者たちと貧困者たちに対して財産と扶助とを保証するからであり、また、法律が人民の利益

に反しているときには人民はその憲法に基づいて意義を唱えることができるからである。

諸君が国王や貴族noblesたちや大金持ちたちの味方でないのなら、われわれに味方したまえ。幾度も繰返し行なった誓いを無視しつつ、既存政權が自分たちの卑劣さに十分に報いてくれるがゆえに、またとりわけ、諸君が一七八九年に打倒したあの耐えがたい専横を諸君に対して行なうことを既存政權が可能にしてくれるがゆえに、身も心もその政權の腕の中に投じた諸君の参謀たちの偽りの言葉に耳を傾けてはならない。

ああ何ということか。祖国の防衛のために国境で諸君が血を流していたときに、諸君は、国内では残虐行為がなされているなどと疑ってはいなかった。自由のために、人民のために戦っていると諸君は考えていた。ところが、諸君が獲得した勝利、諸君が流した血は、かつての暴政の残骸の上に新たな専制支配、新たな差別、新たな傲慢を作り上げることに役立ったにすぎないのである。

あの総裁政府を見たまえ。これ見よがしの豪奢さ、壮麗な官邸、多数からなる衛兵隊、尊大さ、追従者たちの卑屈さを見れば、それがカペー〔ブルボン王朝〕の宮廷であることが分かるであろう。そして、あれほど上品な衣装を身につけた將軍たちは、彼らの贅沢な生活や尊大な態度からして、彼らが取って代わったあの高慢な貴族noblesたちに似てはいないであろうか。ああ何ということか。勇敢な兵士諸君。諸君には、平等を樹立するはずであった革命が、今日にいたるまで、かつての悪党の一派を新たな悪党の群れに置き換えたにすぎないことが分かるであろう。

愛国的な行政官たちは不幸な人びとの扶助に向けて革命を指導していた。また平等の友である上官たちは、諸君を勝利に向けて指揮していた。ところが彼らは、恐怖政治家であるという名目で解任されてしまった。祖国を救った恐怖政治が犯罪となっているのであり、しかも、この上なく献身的にさまざまな危険に勇敢に立ち向かった勇氣ある人びとは、きわめて忌まわしい凶悪犯として反革命的な殺人者たちの的とされたのである。

反革命が二年間にわたって続いた後となつては、諸君は迷いから覚めているはずである。恐怖政治家とは、革命が始

まって以来、人民の諸権利のために戦ってきている人びと、絶えず諸君のために褒美を、そして不幸な人びとのために扶助を要求してきている人びと、人民の敵たちに死を与えてきた人びと、諸君が専制支配者たちの手先たちを幾度となく青ざめさせた際に一緒に戦った人びとのことなのである。さあ、われわれなのか、それともわれわれの敵たちなのか、どちらが諸君の尊敬に値するのか、考えてみたまえ。

兵士諸君。目を開きたまえ。諸君は人民に属している。それでも諸君は人民に敵対して武装しうるのであるか。警察隊（第三章訳注（19）を参照）に所属していた諸君の仲間たちに対するあの憎悪はなぜなのであるか。彼らは追放された。彼らははっきりと目が見えているからであり、またわれわれを切り殺そうとは望んでいないからである。近い将来、諸君が誤りに気づいたときには、諸君も（警察隊員と）同じ目に遭うことであろう。

赤襟あるいは白襟の兵士諸君。諸君はみな、祖国の子にして祖国の防衛者ではないのか。諸君は自由の勝利のために一緒に戦ったのではないか。仲間たちよ。お互いに抱きあおう。そして、人民の報復を恐れつつ諸君の師団のうちに援軍を見出せると思っている権利侵害者たちに立ち向かうために、諸君の武器を集めよう。

諸君の共通の母である祖国は、諸君が諸君の仲間の血を流させるようなことがあれば、怒りに駆られ、呪いのあまり諸君を粉碎することになるであろう。

警鐘（蜂起の合図）が鳴らされている。

諸君は政府の兵士ではなく、人民の兵士である。政府ではなく、まさに人民こそが、自分たちの流す汗と耐え忍ぶ窮乏を通じて諸君に俸給を払っているのである。専制支配者たちが願っているように、諸君が人民に敵対して武装するならば、いかなる危険があろうとも、われわれは諸君と戦うであろう。運命の賽は投げられた。沈黙を守るのは最大の犯罪であり、耐え忍ぶことは、この先数世代にわたる隷従状態を承認することである。われわれは決起する。そうすれば、諸君が自由の防衛者であるのか、それとも専制支配の奴隷であるのかが分かることとなる。ああ。兵士諸君。諸君

は、諸君と同じように抑圧された不幸な人民に属している。われわれの隊列に入って、祖国の抑圧者たちを青ざめさせようではないか。

訳注

〔1〕『パブーフ宅押収文書』には、この文書の筆者は「ブオナローティの筆跡と確認される」との編集者の注記がある。Pièces saisies, op. cit., p. 88. ただし、日付については記載がなく、不明。

〔2〕第三章「言論および出版の自由を妨げる法律」の項および第一章訳注〔77〕を参照。

〔3〕白襟あるいは赤襟 collet rouge ou blanc。チュニク、ドルマン（肋骨柄の入った軽騎兵用の軍服）、上着や軍用外套の襟の色。白は竜騎兵用、赤は砲兵、胸甲騎兵用であった。Dictionnaire militaire. Encyclopédie des sciences militaires, op. cit., vol. I, p. 613. したがって、この呼びかけの対象は竜騎兵、砲兵、胸甲騎兵であると思われる。

第六章 平等者の共和国——財産の共同体と人民主権（その一）

平等社会の法体系と過渡期の法

蜂起委員会は、専制支配の打倒について考察する一方で、ひと時も休むことなく、平等社会の最終的な法体系と平等社会を漸進的に達成しようとするための立法とに取り組んでいた。委員会の活動のうちのこの重要な分野には、陰謀の文書の一部が押収された際に、警察が見つけることのできなかった場所である、委員会の一メンバーの家にあった覚書や草稿が関わっていた。しかし残念なことに、これらの文書は人びとの心を襲った恐怖心からほぼすべてが湮滅されてしまったのであり、私は別のところに保管されていた幾つかの断片しか手に入れることができなかった。これらの残存文書と、さまざまな事実や議論についてそれらに立ち会っていた幾人かの人びとがもち続けていた記憶とを手がかりに

しつつ、陰謀家たちの目的と意図についておおよその、しかし可能な限り正確な知識をもたらしよう努めたい。私はまず〔本章では〕、陰謀家たちがフランス人を徐々に導こうと望んでいた（目標たる）市民社会の政治的形態 *forme civile et politique* を説明する。次いで〔第七章および第八章〕、フランス人にそれへの備えをさせ、それへと導こうとする際に陰謀家たちが当てにしようとしたいくつかの過渡的制度を報告するつもりである。

あらゆる財産の所有権は単一であり、人民に属する

蜂起委員会がパリの民衆に要求しようとして望んでいたデクレから、新たな社会体制が生じるはずであった。まず、そのデクレでは、個人的所有は自然法に由来するものではけつしてなく、成文法の作り上げたものであり、民法と同様、修正あるいは廃止することができる、ということが暗黙のうちに認められていた。そこでは次に、国土のうちに含まれるすべての財産の所有権は単一であり、また、その所有権は唯一その果実と利益 *usufruit* とを再配分する権利を有する人民に属していることが、原則として主張されていた。

確かにこれらの真理の公表は、逆の体制が不可避的にもたらす結果たる苦痛と隷従とにずっと前からあえていた大衆にとってはきわめて喜ばしいものであった。しかしながら、人類にとって有用な実結果がもたらされるよう熱心に努力しなかったならば、それ（公表）は耐えがたい愚弄にすぎなかったことであろう。

共同の利益のために、財産と財産を産み出す労働との配分を調整する権利は社会に属していること、また、諸国民を圧迫しているあらゆる災禍が、汲めども尽きぬ泉から流れ出るかのようにこの配分の不平等に由来していることが認められる以上、社会はこの不平等が永遠に消滅するのに必要な措置を講じなければならないこととなる。

その場合に、その災禍に対して打つべき手は、所有権の修正に求めるべきなのか、あるいはその全面的廃止に求めるべきなのかを決定することが、まだ残されている。

陰謀家たちがどのような理由から、個人的所有の廃止を自分たちの企ての最終目標として採用することに決めたか、また、どのようにして、あらゆる不平等の源泉を枯渇させる唯一の手段たる、財産と労働の共同体 *communauté des biens et des travaux* の樹立を達成し、また、不平等に由来するあらゆる偏見と災禍とを一掃するつもりでいたか、読者は本書を通じて理解されたであろう。古代ギリシア・ローマの偉人たち、そして「フランス」革命の偉人たちの教訓と模範とに学び、また、フランスにおいて少し前に見られたさまざまな措置に励まされた陰謀家たちは、フランス人に「これまでとは」違った習俗を与え、また、フランス人を祖国と祖国の法とに愛着を覚える人民とし、国内では幸福で、国外では愛され、尊敬され、模倣される人民とする計画を抱いたのであった。

誰もが幸福な生活を送る権利。万人に平等な労働義務

この社会形態の下では、個人的な富は姿を消し、所有権は、各個人が社会体 *corps social* の他のすべての構成員と同じように幸福な生活を送る権利に置き換えられる。あらゆる制度の原則となるこの侵すべからざる権利の保証は、協同社会の構成員 *associé* 一人ひとりに対して課せられる、社会の維持、繁栄、そして保守を確実なものとするのに必要な労働の一部を引き受ける義務のうちに、すなわち万人に対して幸福を享受する平等な権利を与える自然法の結果として、万人にとって平等な「労働」義務のうちにある。

農業および必要不可欠な工芸

市民たちにとって第一の、そしてもっとも重要な仕事は、自分たちに食料、衣料そして住居を確保してくれる仕事であり、農業と、土地を開拓し、建築物を建て、家具を製造し、布地を生産することに役立つ工芸 *arts* とを目的とする仕事である。そして、あらゆる耕地が同じ農作物の栽培に同じように適しているわけではないので、公行政が主要にな

すべきことのひとつは、カントンごとに、その土壌と気候にもっとも適合し、また豊穡と平等にとってもっとも有利な生産物と労働とを設定することで行なければならない。

市民の割りふり

あらゆる耕地があらゆる種類の食料品を同じように豊かに生産しうるわけではないのと同様に、人間も幾つもの種類の仕事に効果的に携わることとはできない。社会がその構成員一人ひとりの平等かつ適度の労働から社会が期待すべき利益をすべて引き出すためには、また、習熟によってその仕事の困難さが軽減されるためには、さまざまな仕事はそれぞれ別個でなければならず、一人ひとり自分の職業をもたねばならないのであり、また、例えば、金属を溶かす人びとが木工や織布等々を強いられることがあってはならない。

それゆえ財産と労働の共同体では、市民を幾つもの範疇に割りふる必要が生じるのであり、法律によって、それぞれの範疇に対し、国民の必要に応じて、また至高の平等原理に基づいて、個々の分野の労働が割りふられるのである。

市民の割りふりは公教育において始まる

この割りふりは、後述する〔第八章〕こととなる公教育の諸施設において始まる。それらの施設の管理運営を担当する行政官が、法の命ずるあらゆる部門の労働をそこで実行させ、それぞれの部門に生徒の能力および性向を考慮しつつ、必要に応じた数（の生徒）を割りふる。

全員労働の目的たる豊穡

年老いたかあるいは身体に障害があるために活動できない人びとのみが免れることのできる、こうした全員就業の日

差す大きな目的は、万人にとって必要なものをあり余るほどに保障すること、そして、公序良俗によって禁じられていない娯楽のためのものを万人に提供することである。万人に分け与ええないものは、厳しく排除されねばならない。

労働は法によって規制される職務である

問題となっている制度の下では、人民の暮らしと楽しみに必要な労働は、それらが辛い仕事になることがけつてないように、可能な限りわずかな苦痛しかもたらさないように、ある市民に対して他の市民よりも多くの負担を課すことがけつてないように、また、すべての人が習慣によって、祖国への愛から、喜びに魅せられて、また世論の称賛によって労働に加わるよう促され、励まされるように、法律によってさまざまな規則が定められる職務である。

こうして、大多数の者が耕し、種を蒔き、収穫し、倉庫に納入する。これに対して、一方には住居や公共建築物や道路や橋や運河を築き、修理する人びとが、また他方には動物の繁殖と保存とに気を配る人びとがいることとなる。後者は糸や羊毛や皮革を下ごしらえし、それらを用いるのに対し、前者は家具や荷車や船を作り、あるいは金属等々を加工することとなる。せひとも必要とされる労働時間は法律によって規制されるが、その法律は、弱者に配慮しつつ、すべての人びとが、彼らの体力と彼らが担当する労働の辛さとに平等に比例した義務を課せられていると感じるよう、世論の励ましと行政官の賛辞によって、きわめて頑強な人にはより大きな活動に駆り立てることとなる。

骨の折れる労働の軽減

労働の多様性が、幾つかの範疇にとってあまりにも顕著な過剰な労苦をもたらすことを恐れて、以下のように考えられていた。すなわち、(一) 新しい機械を発明し、古い機械を改良することによって人間の労働を軽減するよう、さまざまな学問に対して要請すべきであろうし、また、(二) 男性に対する教育と機械工学および化学の助けとによって次

第にその不快さが軽減されることが期待されていた厄介な仕事を、健全な市民すべてに代わる代わる担当させるのが賢明であろう、と考えられていた。

おそらくは、必要最小限の労働を簡単な労働と骨の折れる労働とに区別し、どの市民にも前者の範疇の労働と後者の範疇の仕事とに従事する義務を負わせるのが適切だったはずである。またおそらくは、労働の重荷を体力の向上と減退とに見合つたものとするために、もうひとつ別の形で、市民を年齢によって区分するのが公平だったはずである。なぜなら、このことに關しては、平等は、疲労の強さよりも、働く人の能力によって測られるべきだからである。

労働が公平かつ全員に対して配分されることから、万人の幸福にとって必要なものだけに仕事が増減されることから、動物をより巧みに用いることから、また、道具や機械を改良することから、(一)あらゆる土地の有効利用と真に必要なものの増加、(二)無為徒食の消滅とそのことによる個々人の労働の非常な軽減という、人類の幸福にとって非常に好都合な二つの結果がもたらされる。

享受の平等

土地を肥沃にし、土地がもたらす生産物を準備することに万人が平等に協力するのであるから、そのことに由来し、また自然によって人類の保存および幸福が結び付けられている享受に万人が平等に与るのはきわめて正当なことである。いかなる不公平も社会の安寧を乱すことがないように、土地および製造業の生産物はすべて公の倉庫に預けられ、平等な配分について責任を負う行政官の監督の下にその倉庫から出荷され、平等に配分されることが必要である。

このように設立される社会がひとつのコミュニティないしはディストリクト(郡)というあまり広くない領域に限定されている場合には、その行政の面では非常な単純さが行き渡るであろう。その住民はそこで産出されるものしか受ける権利をもっていないからである。しかし、数百万人もの人びとで構成されており、彼らがその勢力と持続性を保証す

る広大な共和国では、その共和国を構成する各部分の富の所有権は人民全体に属し、各地区「セクション」の住民はその他すべての地区の食料品および生産物を平等に消費し、使用する権利を有する。「それゆえ」余剰のある地域は、必需品が不足している地域の必要を満たさなければならない。それゆえ、きわめて広大な社会における行政には、行政のうわべだけを考察する人びとを当惑させる、かなりの複雑さがもたらされる。しかし根本的には、話題としている諸制度が設立されるおかげで、いかなる食品も金銭欲から切り離されることによって、現状では上司の汚職と部下の着服とによって絶えず引き起こされている損害をもはや懸念する必要がなくなるときには、行政はすべて、きわめて正確な指図ときわめて規則正しい運営とを受け入れることのできる、単純な計算問題にすぎなくなるのである。

きわめて広大な国に適用される共同体の利点

さらに、共同体の擁する領域が大きくなればなるほど、共同体がその領域の各部分に対して提供する、あらゆる種類の生活必需品不足を防ぐための保証はますます確実なものとなる。他方、人間および品物のこうした大規模かつ頻繁な相互交流 communication からは、きわめて全般的で強力な幸福や友愛や献身の感情が生まれるのであり、そのために、いかなる人間の力も、その国土を侵害することはできないし、また諸制度が強固に樹立された直後から、それらの制度を破壊することもできない、と考えられるのである。

富の平等な分配

きわめて広大な土地の上に散らばるきわめて多数の人間からなる協同社会 association にはもうひとつ別種の職務が必要とされるのであって、それらの職務がなければ、共和国のあらゆる部分を強固に結び付けている絆が断ち切られることとなり、また、あるひとつの郡「アロンデイスマン」の余剰はその郡にとっても、他の郡にとっても無駄なもの

となつてしまふであらう。それらの職務は、土地および製造業の生産物を、生産高が需要を上回っている場所からそれが不足している場所に運搬することを目的としており、(一) 上級の行政官職が全体の富を各部分の需要と比較し、移動させるべき物資を明らかにし、それらの物資を運び出すべき場所とそれらを運搬して行くべき場所とを指定する職務、(二) 下級の公務員が運搬を監督し、実施するという職務、の二つの種類からなる。

われわれはすぐ後で「第七章」、共和国を構成するすべての部分の間での不断の相互交流をわが共和国の最高行政機関がいかなる手段によつて容易に引き受けることができるはずであつたか、を検討することとなる。しかしここでは、そうした状況においては、かつて極度の労苦によつても極度の貧困しかもたらされなかつた不毛な地域の住民が、彼らの苦勞の一部を軽減され、また、きわめて肥沃な土地の生産物を分かち合うよう呼びかけられることとなる、ということとを指摘するにとどめておこう。

運搬に関して蜂起委員会は、社会は運搬を、供給のための不可欠の手段と見做すだけでなく、祖国の美しい景観、さまざまな制度、法律によつて樹立されたはずの平等社会の恩恵について一人ひとりに認識させることによつて、祖国への愛を堅固なものにする好都合な機会としても見做さねばならない、と考へていた。したがつて彼ら〔蜂起委員会のメンバーたち〕は、健全な市民すべてが、この仕事に、また郵便配達人や伝令などの仕事に代わる就くよう要請されることを望んでいた。

このあたりを読んでいる読者の皆さんには、陰謀家たちが自分たちのごくひそやかな考えを表明していた文書のすべてを私が目の前にしているわけではないことを思い起こしていただきたい。それゆえ私は、彼らが構築するつもりでいた機構のすべての部分を詳細に説明できるわけではないのであり、私の記憶と私が再び手にした幾つかの断片との助けを借りて伝えうる限りにおいて、彼らの基本的な考えと主要な提案とを伝えるに止めざるをえない。

対外貿易

われわれが身につけた悪しき習慣が大変なものであり、またわれわれが無分別にも作り上げてきた欲求がきわめて多様であるがゆえに、フランスでは産出されない原料のいくつかを依然として外国から取り寄せざるをえなくなる、と考えられる。少なくとも、いかなる風土も医術に対して提供しているさまざまな原料については、外国に頼らなければならなかったはずである。

人民があらゆる財産の単一の所有者であることから、自らの余剰物と外国の余剰物との交換については、人民だけが諸外国と交渉する権利をもっている。その上、この種の交渉は責任ある行政官以外の人びとに任されたならば、必ずや、個人所有がもたらす災禍に再び陥り、国家を新たな腐敗にさらすこととなるであろう。そのことから、諸外国との貿易関係は共和国の最高指導部の手に委ねられねばならない、ということとなる。¹⁾

用益権

また以上の説明から、共同体が樹立された場合には、市民はいかなるものに対してであれ、所有権と呼ばれているものを取得することはけつてない、ということとなる。市民は、行政官による現実の引渡しを通じて市民が占有することとなる物〔有体物 *objets*〕に対して使用権あるいは用益権²⁾をもつにすぎない。こうした経済秩序においては、所有権は常に共和国の手に残るのであり、共和国はいついかなるときでも、使用によって損なわれないものを処分することができる。

こうした体制がいったん樹立されると、将来の需要の充足は、万人が従事する労働によって、また一人ひとりのきわめて顕著な利益によって大いに保証されることとなる。もはや財産を渴望する理由はなくなる。将来に不安を抱く理由はすべて消え去り、文明人の心を苦しめる気がかりや悩みは大部分、その原因が尽きてなくなってしまうからである。

年老いて身体が不自由になった結果としての貧困への心配および子供たちの将来についての不安という二つの感情が、自分の労働あるいはわずかな財産を糧に生きている人びとを苛んでいるのであるが、共同体においてはこうした辛い感情は経験されなくなるであろう。

老人と身体障害者

健全者に課せられる労働の義務には、幸福な生活を送る権利と、身体障害あるいは諸器官の衰弱によって労働が辛くなったり、あるいは不可能になったりした場合には、労働を免除され、十分な世話を受ける権利が照応する。それゆえ共同体秩序の下では、老人および身体障害者に休息と安らぎとをもちたすことは、社会の主要な義務のひとつなのである。その代わりに共和国は、経験に基づく教訓を老人たちから受け取るのであり、その教訓を青年の競争心を煽る主題とするであろう。また老人たちは、道徳および法の番人、習俗の監察官¹⁾、および美徳の維持管理者に就かせるよう決められていた。

これらの制度がもたらす効果のひとつは、祖国への愛が支配的な情念となるほどに強固に、市民をそれらの制度に結びつけることであったように思われる。教育を通じて、立法機関は家族愛や親族愛のすべてをこの感情に従属させたことであろう。また立法機関は、すべてのフランス人の真に兄弟愛的な団結が幸福で輝かしい結果としてもたらされるほど、その感情を激しいものとすることができたことであろう。こうした考えは、われわれ陰謀家にこよなく愛されていたのであり、彼らの計画すべての真髄だったのである。家族の絆の利点と難点とに関する議論の最中に、立派な美徳を称えられたことのないような父親の姓を子供が名乗ることを禁ずる提案が明確になされたことを、私は覚えている。

老人たちの晩年を美しいものとしなければならぬということが、若者たちの美徳を強固にし、また祖国は、すべて社会の経費で行なわれる共同の教育 *education commune* の好ましい効果と結びついたこの幸福の交換を通じて、いか

なる道徳的理由も進展を止めることができない人口増加によって、力の増大を手に入れたことであろう。

種の繁殖の奨励

この社会体制の下では、すべてが人類の増加に有利に作用する。共同体は両性が近づく機会を少なくしているさまざまな原因を取り除くのであり、また共同体は、われわれが経験したことのない平静さを人の心に与えるのであり、適度で多様な活動を通じて身体を強くし、贅沢と無為徒食とを廃することによって、万人に役立つ生産物を増大させるからである。

この制度が古代ギリシア・ローマの人びとの制度よりも優れている点

まさに同じような方法によって、古代ギリシア・ローマのきわめて著名な立法者たちも、その同胞市民たちに対して程度の差こそあれ、自由と幸福とを味あわせていた。中でもリュクルゴス〔前九世紀のスパルタの立法者〕は、自然が表明した社会の目的をもう少しで達成するところであった。しかし、古代ギリシア・ローマの人びとが適用していた国際公法 *droit des gens* は、そしておそらくは不当なエゴイズムもまた、彼らの諸制度すべてに非人間的な慣習（自由人と区別される奴隷の保持）を持ち込んでいたのであるが、われわれ陰謀家の構想する制度はすべて、そうした慣習に汚されることはまったくなかったであろう。著しく異なることに、〔われわれの共同体においては〕ギリシアおよびローマとは違って、一方の人びとの自由が他方の人びとの隷属状態をもたらすことはなかったであろう。

住民の新たな配分

富の不平等が、ある人びとには過酷な労働を余儀なくし、また別の人びとには墮落を招く無為を余儀なくするがゆえ

に、農村には、往々にして耕作には不足であつて、しかも常に過度の疲労に打ちひしがれている、わずかな住民しか残っていない。「これに対して」都市には過剰な人口がひしめき合つてきたのであり、あるいはそこで農村が生産した富を逸楽の中で浪費し、あるいは金持ちたちの快樂の手下となり、また公行政の複雑さを使って安楽な生活手段を手に入れた。

平等状態に近づくにつれて、社会からは必ず、習俗と住民とに破壊的な影響をもたらすこうした大規模な人口集中が取り除かれるであろう。すなわち、労働に復帰するのが当然の人びとは過剰に労働を抱えている人びとのもとに戻り、彼らの負担を軽減することとなるであろう。勤勉な市民たちは、自分たちを育ててくれた人びとの生活をより快適なものとしに行くであろう。「新しい」政府は簡素なものとなり、農業および有益な工芸から引き抜かれてきたあの大量の職員を政府から遠ざけることとなるであろう。また、秩序の維持は各市民が自分の真の義務をどのように厳格に果たすかに左右されているのであつて、秩序維持はもはや、非常に簡単に自分の行動を公の監察から隠すことのできるあの群衆とは相容れないものとなるであろう。

大都市の衰退

もはや首都はなくなり、もはや大都市もなくなる。⁽⁶⁾すなわち国土は、少しずつ、きわめて健康的で快適な場所に建設され、また、あらゆる方向に切り開くことが全体の利益となる道路と運河とによって容易に全体とつながりうるように配置された村々で覆われることとなるであろう。

住居の簡素さ

すべてが平等の最高の法の優位を認めるがゆえに、目を楽しませ、公秩序を維持するために、優雅に左右対称的に配

置された住居の健康適性、利便さ、そして清潔さが城館の豪奢さに取って代わる、と考えられる。

公的建造物の壮麗さ

もはや宮殿が存在しなくなるときには、あばら家ももはや存在しなくなるであろう。家屋は簡素なものとなり、建造物の壮麗さとその素晴らしさをいっそう引き立たせる技芸とは、もっぱら公営店舗、円形劇場、円形競技場、水道橋、橋、運河、広場、古文書館、図書館に、そして何よりも、行政官たちの討議と人民主権の行使とに充てられた場所にのみ用いられることとなるであろう。

適切に樹立された社会においては、立法機関はいかなることも忘れてはならない。また共和国においてはいかなることも、共和国の目的、絆そして長所である平等の原理に反してはならない。市民たちが平等の原理の心地よさをわずかでも味わったならば、やがて市民生活のあらゆる部門がその原理のもとに立ち戻ることとなるであろう。

家具と衣服

同じ規範が衣服と家具にも適用されうる。諸個人の幸福と公秩序の維持とにとって、市民が普段から同胞市民を同等者や兄弟と見做すこと、また市民がいかなる所でも、表面的なものであれ、権勢と屈従との前兆である優越性のほんのわずかなしるしにも出会うことのないようにすることが重要である。平等と簡素さは優雅さや清潔さと相容れないわけではない。例えば異なった色や形は、年齢と職業を識別するのに役立つのであり、市民が作業場では集会や祭りの際と同じ服装をしなくても、女子が既婚女性とは同じ服装をしなくても、また、若者、大人、老人、行政官そして軍人がそれぞれ特別の服装をしても、何ら構わないとされた。

この点に関しては、蜂起委員会は、健康に適っていることと諸器官の発育との重要性が全面的に認められるべきであ

り、流行や軽薄さはまったく認められるべきでない、ということで見解が一致していた。蜂起委員会はまた、フランス人民自らを他のすべての人民と区別する服装を採用することも望んでいた。

改革のもたらす好都合な帰結

きわめて壮大な変革の効用を十分に理解するためには、本書の読者の皆さんには、蜂起委員会が自らの企ての正当さを示し、またその企てに固執する気になった際の論理をしばしば思い起こしていただかなければならない。蜂起委員会が述べていたところによれば、富や無駄話や才気や無為や傲慢さによって公衆の注意を引いており、国民のうちの健全で尊敬に値する部分を自称している範疇の人びとだけに視線を向けるならば、その範疇の人びとは、社会体の新しい生活に移行する際に多くの不自由を味わうこととなる、と認めねばならないのであった。また、われわれのうちで、間違った教育によって有害な習慣を身につけた人びとは、彼らが受けることとなる再生〔証拠書類 五〕の訳注〔一〕を参照〕に時として驚かされるにちがいない。しかし逆に、わが同胞市民の大部分が陥っている疲労や貧困や苦悩や隷属の状態のことを考えるならば、また、大部分の同胞市民に苦勞と不自由を強い喜ばない喜びは金持ちにとっては存在しないということを考慮に入れるならば、平等状態への回帰はすべて、数限りない悩みの再発を防ぎ、また、おそらくはあまり華々しいものではないにせよ、一握りの腐敗した権利侵害者の不平の声とは比較しえないような広大な恩寵の場を開いてくれるのであって、この一握りの権利侵害者を、彼らに真の幸福をもたらすためにも、また万人と後世の人びとに幸福をもたらすためにも、有無を言わせることなく、より分別ある感情に立ち戻らせなければならない、ということを受納得していただけよう。

非生産的な仕事

社会の維持に必要であつて、健全な市民すべてに平等に配分される労働は、彼ら一人ひとりにとって、法によって履行を求められる義務である。しかしながら、人生には、逸楽や倦怠にとられないようにしなければならない長い余暇が残されている。市民の幸福は、したがってまた、社会の自由、繁榮、そして持続は、この余暇を賢明にかつ自由に使うことに左右される。身体を力強くすることによって精神を強固にすること、無理強いすることなく墮落への道を閉ざすこと、人生のあらゆる瞬間を楽しむものとする、美徳に対する感動を生じさせること、そして、祖国をその子供たちにとって唯一の快適な住み家とすること、これらは、この余暇を自由に過ごすために真に人民的な立法機関が設ける仕事から生じさせる大きな効果である。

欠陥のある諸制度が、富への愛を国家の主要な原動力としつつ、富を獲得する才能を尊敬すべき特質のひとつに数えている場合には、このような仕事への関心を取り入れようとしても無駄なことであろう。そして、そうした仕事を貪欲や不正取引の精神と結び付けることにでもなれば、やがてそれらの仕事はこの上ない軽蔑を受けることとなり、また、それらの仕事に従事しようとして、自分の仕事への気配りをおろそかにする人は、騙されやすい人間と見做され、自分の善意が原因の報いを間違ひなく受けることとなるであらう。

良俗

身体運動、精神修養、若者に対する徳育、全員に対する知育、武器の手入れ、軍隊式隊形移動 evolution、神性への表敬、公開競技、祭典の飾り付け、有用な技芸の改良、法律の学習、行政、そして人民の討議を対象とするこれらの仕事は、人びとの生活にとって不可欠のものでもなく、またそれらの大部分が法律によって命じられているものでもない、という点において、その他の仕事と異なっている。それらの仕事には自発的に従事すべきであつて、強制があつてはな

らない。それらから好ましい結果を得るために、巧みな立法機関は自由な選択に基づいて市民をそれらに配置する。この点で、傑出した政策は、徳育、模範、論理立った思考、世論、そして喜びの魅力によって、人間の心が社会をより自由により幸福に、そしてより持続的にすることを目差す欲望以外の欲望を永遠に抱きえないようにするように、人間の心を変化させることである。ある国民がこの段階にまで達したときには、その国民は良俗をもっている。そのときには、いかに骨の折れる義務も喜んで履行され、法律は快く従われる。生来の自立性に対して課せられるさまざまな制限は恩恵と見做されるのであり、道理にかなったさまざまな提案は反対を受けることがない。しかも、政治体には利害、意思そして行動の一体性が存在するのである。

暴力的に解体される数日前のこと、蜂起委員会では新しい諸制度のうちのこの部分について長時間にわたって会議がもたれた。しかし残念なことに私には、すべての状況を伝えうるわけではない。自分に課した義務をできる限り果たすために、私の記憶に痕跡を留めているすべてのことを述べるつもりであるが、しかし、私の考えを委員会の考えに置き換えてしまうことを恐れて、空白を埋める努力は払わないでおく。

習俗の源泉としての徳育

蜂起委員会の計画では、習俗を形成する鑄型は、共和国の直接指導の下に置かれる共同の教育 *education commune* のうちにあった。習俗はその後、人生の最初の数年間の間に若者たちが愛することを学んだ同じ感情、同じ意見、そして同じ慣習を彼らが見出すこととなる国家〔市民社会 *civitas*〕の中で強化されることとなる。この徳育については、それを永遠の基礎とする〔平等社会の〕機構の概観について補足説明〔第七章を参照〕を行なった後に、述べる〔第八章を参照〕こととする。（本章は未完結。次号に続く）。

(1) 第四章「バリの蜂起した人民に提案すべきデクレ」の項を参照。

(2) 共同体制度の下ではじめて、機械の使用は、それが必要で快適な品物をいっそう豊富にしつつ、人間の労苦を軽減するがゆえに、人間にとって真の恩恵となるであろう。「ところが、これに反して」今日では、きわめて多くの手労働を消滅させることによって機械は多くの人びとからパンを奪い取り、機械が利益を増大させている幾人もの飽くことを知らぬ投機家に利益をもたらしているのである。

(3) 国民がもつ大所有権を、小共同体 *peuple* が存在するのと同じ数の部分的な所有権に分割した場合には、どの小共同体も自らの余剰物と交換することによってしか、不足する必需品を手に入れることができなくなったであろう。したがって、不毛な土壌や季節の変調が原因で余剰物のない小共同体は、飢饉という厄介事に見舞われたことであろう。それゆえ、われわれが樹立しようと望んでいた、あの全面的友愛とあの無限の相互扶助が消え去ってしまい、自己中心的で中傷好きの不正取引の才がやがてこれらの小共同体すべての議論を支配し、すぐに市民の心の中にかつての食欲さを目覚めさせることとなるであろう。

(4) 社会を構成する要素（構成員）が利害の多様性と対立によって分裂しているときには、その社会には腐敗が存在する。したがって、国民の内部に万人の幸福と相容れない要求を抱く人びとが存在するときには、国民は腐敗しているのである。

(5) 換言すれば、絶対的命令権 *empire* あるいは自分の好みのままに処分する権限、つまり「ラテン語で」使用し、乱用する権利 *jus utendi atque abutendi*。

(6) 私の思い違いでなければ、大都市の存在は社会不安の兆候であり、また市民社会の混乱を示す確かな前兆である。大地主、大資本家そして富裕な卸売商が大都市の中枢をなしており、「他方」その周囲に彼らに必要なものを供給しつつ、彼らの趣味におもねりつつ、彼らの気紛れに加わりつつ、また彼らの悪徳を助長しつつ、彼らに食べさせてもらう多くの人びとが集まってきている。

ある都市の人口が増えれば増えるほど、ますます多くの奉公人、身持ちの悪い女性、飢えた作家、詩人、音楽家、画家、才人、役者、ダンサー、司祭、仲介人、盗人そしてあらゆる種類の芸人が見られるようになる。

奉仕 *services* と賃金とが永続的に交換されることから、ある人びとには権威と命令の習慣が、またそれ以外の人びとに

は従順さと隷属の習慣が生まれてくる。後者は、這いつくばりながらも、前者の生活習慣、態度、傲慢さそして物腰〔礼儀作法〕を身につけ、また、自分たちより富に恵まれていない人びとに対して見下した態度をとることに慣れてくる。双方ともに、実質的な幸福を軽蔑しつつ、金持ちになり、有力者となり、気に入られること、そして何よりもそう見えることを望んでいる。

大都市の装飾物であるといわれているあの豪華な邸宅、広大な庭、高価な家具、きらびやかな衣装、そして騒がしいサロンは、それらに目を奪われる人びとの心に有害な印象を与える。すなわち、一方でそれらは、それらを所有している人びとの高慢さを増長させるからであり、また、それらをもたない人びとのことを、嫉妬と貧困ゆえに所有する人びとから絶えずそれらを奪い取り、また自分たちが陥っている屈従と貧窮状態への報復をする敵と見做す気にならせるからである。他方では、それらから排除された人びとは、あるいは羨望や憎悪ゆえに正道から逸れ、あるいは悲惨な状態や卑しめられた状態に陥ることによって、野望や専制支配の支持者となるからである。〔しかしまた〕先に挙げた事柄〔豪華な邸宅や広大な庭など〕すべてが、それらに享受している人びとと、それらを望んでいる人びととを現実不幸にする。なぜなら、前者は倦怠と猜疑心に悩まされ、後者は自分たちより幸福な人びとが所有していると彼らには思える想像上の財産に対する羨望に苦しまれるからである。

さまざまな娯楽や豪奢さや称賛を求めて大都市へと向かう人びとは、働くことをやめかねない人びとであり、自然が各人に課している労苦の分担分をすでに他者に転嫁しているのである。そのとき、田舎に留まっている人びとの仕事は自然の限界を超えるものとなり、農業および必要な工芸に関する労働は、彼らにとってきわめて辛くて骨の折れるものとなった。その苦痛は、常に進行することによってさらに悪化し、ついには、ガレー船の漕役夫とあまり変わらないものとなる農民および労働者の職業が嫌悪され、放棄されるほどになってしまう。するとどの農民も大都市に眼差しを向け、できることなら、彼の想像力によって誇張された魅力をもつ財産を大都市に探しに行こうとする。愚かにも大都市に行った場合には、彼はそこで暮らさなければならぬ。前例〔お手本〕は人の心を捉えるものである。人の群れは悪徳を監察 *control* から守ってくれ、欲情は燃え上がり、嫌悪感をもたらずに思われていたものが少しづつ上品さおよび手腕という様相を帯びる。やがて、義務や美德よりも金銭と称賛の方が好まれるようになる。大いに如才なくまた上品にふるまったために、偽善者や嘘つきやベテン師となってしまう。そして幸運の女神が微笑んだ場合には、幸福ではないのに幸福であるように見え、見込み違

いと幻想から不幸のもとに突進するたぐさんの軽率な人びとの注目の的となるという高みにまで到達する。

しかしながら、富や快楽や浪費の魅力から大都市に集まってくる競争相手の数が増大し、その結果、彼らの大部分は安い給料に追いやられ、不節制に疲れ果て、多すぎる子供を抱えて、大都市が存在するところすべてで、目に不快で心を痛めさせる、あの大量の貧窮者の仲間入りをするほどとなるのである。

農業および必要不可欠の工芸が真に社会を養ってくれているのであって、まさにそれらが営まれている場所で、土地を開拓する人であれ、農民に便利な品々や気晴らしを提供する人であれ、人間は本来的にそこで生活するよう運命付けられているのである。

不平等がもたらす直接的な結果である災禍に、国土の広大さ、行政の中央集権化、租税の重さ、公債、過剰な俸給、そして宮廷の偽りの輝かしさが、それらの中心城市と切り離すことのできない別の多くの災禍を付け加えているのであって、ここではジャン・ジャック・ルソーの言うように、女はもはや貞節を信じず、男はもはや美德を信じてはいないのである。

こうした人口の密集が著しくなればなるほど、それだけ財産と諸条件の不平等が当然に予想される。しかも、大衆の不安と不満は不平等とともに強くなるがゆえに、こうした人口密集が生じる場所において、不和と大混乱の原因が多くなる。また、まさにそういう場所においては、真の自由を樹立するために乗り越えるべき障害が多いのである。

司祭たちの欺瞞や軍人たちの暴力や追従者たちの裏表ある態度やスパイたちの裏切り行為について不平が漏らされている。しかしむしろ、それらをなくてはならないものとしている、あの途方もない不平等について不平を言うべきである。どのようになれば、習俗や諸制度やさまざまな法律によって、お互いに羨ましがり、憎しみあい、戦いあうことを余儀なくしているあの多数の人びとの間に、騙したり、恐れさせたりすることなく、外見上の平和を維持できると期待しうるのであるのか。

不平等を育み、さまざまな革命の基本原理が作り上げられるこれらの中心城市、幾度も幾度も専制支配の道具であったこれらの中心城市は、時には自由の温床でもあった。すなわちそれらの都市は、思慮深い人びとがそれらの運動を指導することができ、また、それに続いてそれらの都市の鬱血（住民過多）と腫れとを消滅させることができたなら、正真正銘の「社会」体制を樹立するのを効果的に助けることができるであろう。

〔*〕 ルソー、戸辺松実訳『エミール』（中央公論社『世界の名著 三〇』所収）五一七ページ。「……パリよ、さようなら。名高い都、騒音と、煙と、泥の都、そこでは女はもう貞操を信じず、男はもう美德を信じない。さようなら、パリよ。われ

訳注

われは愛を、幸福を、純潔を求めている。お前からどんなに遠く離れても、離れすぎることはなからう」。

〔1〕 成文法 *loi civile*。 *loi civile* は市民の間での権利と義務、利害など諸関係を律する法の意。教会法との対比で使われるが、*droit écrit* と同じ意味の *droit civil* との混同と思われる。

〔2〕 用益権 *droit d'usufruit*。他の者が所有権（処分権）を有する物を、その実体を保存することを負担として使用し、果実を収益する権利。

〔3〕 監察官 *censeur*。古代ローマにおけるケンソル *censor* が念頭にあったものと思われる。ケンソルは、執政官（コンスル）経験者から選任された昇任順位の中で最高の官職。戸口調査を行なうと同時にローマの風紀の監督にも当たった。

〔4〕 政治体 *corps politique*。「国民」と訳される場合もあるが、政治的諸権利を行使する市民総体のことを指す。

